

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第90集

中 郷 遺 跡

—牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007年3月

豊橋市教育委員会

なか ごとら い せき
中 郷 遺 跡

—牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007年3月

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、豊橋市牛川町字中郷103番地12他において牛川西部土地区画整理事業に伴い事前に実施した中郷遺跡の発掘調査報告書である。調査期間は平成16年12月1日～平成17年2月27日で、調査面積は1,400㎡である。
2. 発掘調査については、豊橋牛川西部土地区画整理組合から委託を受けた豊橋市教育委員会が行い、岩瀬彰利（豊橋市美術博物館学芸員）が担当した。
3. 発掘調査に際して、多くの土地所有者をはじめ、地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
4. 報告書の作成については、井上佳子・竹嶋浩子・平賀静子・補永亨代・大谷孝世・安田明己・原田祥子の援助を受けた。写真撮影は、発掘調査については岩瀬が行ったが、出土遺物は岩本佳子（豊橋市美術博物館嘱託員）が行った。航空写真撮影は株式会社GIS中部に委託して行った。
5. 本書の執筆及び編集は岩瀬が行った。
6. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 調査にあたって作成した写真・カラーライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 歴史的環境 3

第2章 調査の経過

- 1. 調査に至る経過 5
- 2. 調査の方法 5

第3章 遺構

- 1. 掘立柱建物 12
- 2. 柵 18
- 3. 溝 18
- 4. 土壙 21

第4章 遺物 25

第5章 まとめ 31

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	中郷遺跡位置図 (1 / 25,000)	1
第2図	中郷遺跡周辺地形図 (1 / 15,000)	2
第3図	中郷遺跡周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)	4
第4図	調査区位置図 (1 / 2,500)	6
第5図	調査区全体図 (1 / 400)	7
第6図	遺構位置図-1 (1 / 350)	9
第7図	遺構位置図-2 (1 / 350)	10
第8図	遺構位置図-3 (1 / 350)	11
第9図	遺構実測図-1 (1 / 80)	16
第10図	遺構実測図-2 (1 / 80)	17
第11図	遺構実測図-3 (1 / 80)	19
第12図	遺構実測図-4 (1 / 80)	20
第13図	遺構実測図-5 (1 / 80)	23
第14図	遺構実測図-6 (1 / 40)	24
第15図	出土遺物実測図-1 (1 / 3)	27
第16図	出土遺物実測図-2 (1 / 3)	28

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	29
-----	---------------	----

写真図版目次

1-1 調査区全景 (垂直)	2 調査区全景 (東から)
2-1 調査区全景 (北から)	2 調査区全景 (南から)
3-1 D-6区~G-9区付近全景 (垂直)	2 F-10区~J-8区付近全景 (垂直)
4-1 J-7区~M-5区付近全景 (垂直)	2 L-6区~O-9区付近全景 (垂直)
5-1 N-11区~Q-11区付近全景 (垂直)	2 SB-2全景 (北から)
6-1 SB-6全景 (北から)	2 SB-7・8遠景 (西から)

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 7-1 SA-1 全景 (北から) | 2 SA-1・P1 (北から) |
| 3 SA-1・P2 (北から) | 4 SD-1 全景 (東から) |
| 8-1 SD-2 全景 (南から) | 2 SD-3 全景 (北から) |
| 3 SD-4 全景 (北から) | 4 SD-5 全景 (北から) |
| 9-1 SD-6 全景 (西から) | 2 SD-7 北部分 (南から) |
| 3 SD-7 全景 (西から) | |
| 10-1 SK-2 (北から) | 2 SK-3 (東から) |
| 3 SK-8 (北から) | 4 SK-14 (東から) |
| 11-1 SK-4 (北から) | 2 SK-6 (北から) |
| 12-1 SK-11~13・16 (東から) | 2 P-8 区風倒木痕 (西から) |
| 13-1 M-8 区風倒木痕 (北から) | 2 M-8 区風倒木痕 (南から) |
| 3 現地説明会風景 | |
| 14 出土遺物-1 | |
| 15 出土遺物-2 | |

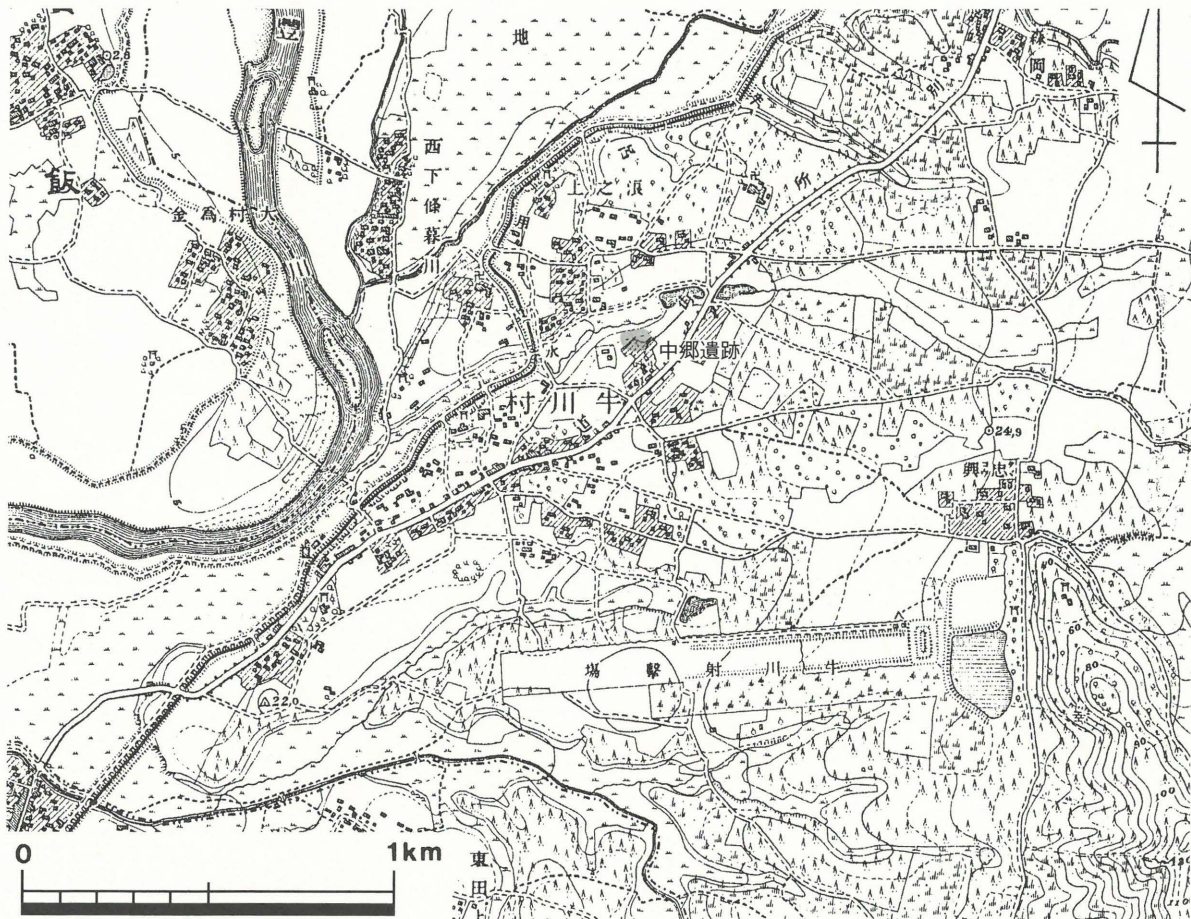
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1・2図)

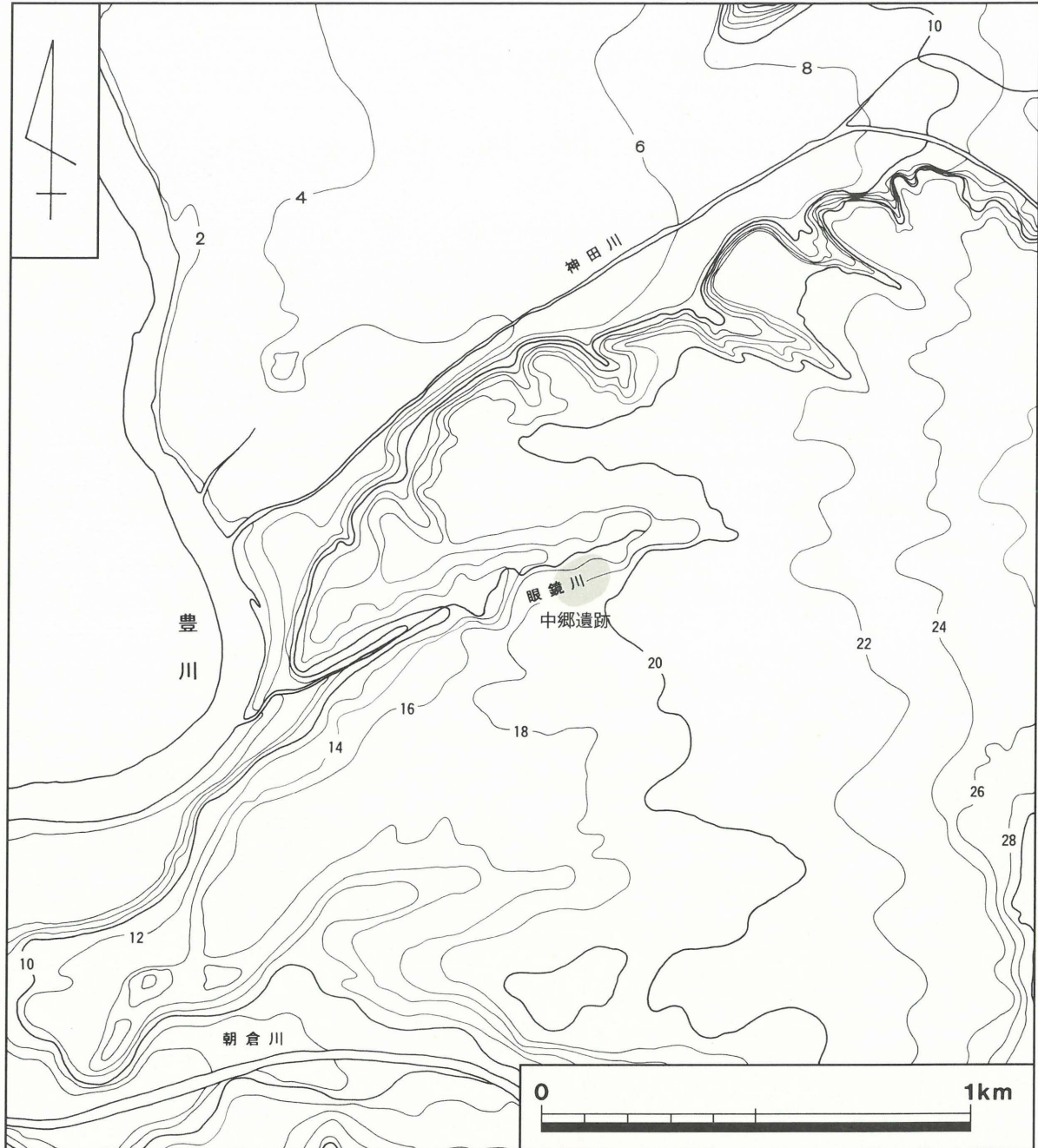
豊橋市は西側を三河湾、南側を太平洋、東側を弓張山系の山地、北側を豊川に囲まれた都市である。市が接する三河湾は東部湾奥部に相当し、そこには豊川が流入している。豊川は奥三河山間部を源とし、中央構造線に沿って南西に流下する1級河川である。中郷遺跡は、豊橋市中心部から北東に4km程のところであり、豊川の支流である眼鏡川によって開析された標高18m前後の段丘上に位置する。

中郷遺跡が所在する段丘は、朝倉川と神田川によって開析された牛川面と呼ばれる河岸段丘で、中位面に相当する。この牛川面は、西側に広がる豊橋平野の沖積低地と高低差が10~15m程もあり、段丘崖によって明確に区切られている。東側は弓張山系の山地と接しており、そこから南西に向かって緩やかに傾斜している。この牛川面の特徴は、豊川によって形成された河岸段丘上に、その支流の朝倉川や神田川による扇状地性の堆積物が覆っていることで、比較的大きな礫を含んだ粒の揃わない砂礫層が形成されている。

中郷遺跡は、牛川面が更に眼鏡川によって開析された段丘北端部に立地し、川との比高差は約5mである。眼鏡川は、段丘端から内部に1kmほどのところに湧水による池があり、そこで谷が消滅し



第1図 中郷遺跡位置図 (1/25,000 明治23年 大日本帝国陸地測量部より)



第2図 中郷遺跡周辺地形図 (1/15,000)

てその上流では水流が認められない。これは東部の弓張山系の山地から伏流水が流れてきているため、一般的な扇状地とよく似た状況にある。このような扇状地の扇頂や扇端では湧水地に集落が形成される傾向がある。中郷遺跡は、このような水利の得やすい良好な環境に集落が営まれていた。

参考文献

- 小林久彦 2006 「第1章 遺跡の立地と歴史的環境」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第84集 西側遺跡(Ⅱ)』
1～5頁 豊橋市教育委員会：豊橋
- 水野季彦 1995 「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集 熊野遺跡』 1～4頁 豊橋市教育委員会
・豊橋遺跡調査会：豊橋

2. 歴史的環境 (第3図)

中郷遺跡のある豊川左岸の段丘縁部は遺跡の密集地である。ここでは、時代ごとに周辺遺跡について述べる。

縄文時代

早期では、竪穴住居や煙道付炉穴が多数検出された眼鏡下池北遺跡(28)がある。このほか、押型文土器が出土したおいほて遺跡(22)や浪ノ上遺跡などが知られている。前期では西側北遺跡から北白川下層Ⅱb式土器や竪穴住居が発見されている。中期では洗島遺跡(15)から中期中葉を中心とした竪穴住居が検出されている。晩期になると周辺の遺跡でも土器片が出土するが、規模の大きな遺跡は確認されていない。

弥生時代

前期では遠賀川式の環濠が検出された白石遺跡がある。中期になると遺跡数は急増し、西側遺跡(16)では竪穴住居が検出している。他にも熊野遺跡、高井遺跡、浪ノ上遺跡、狭間(森岡)遺跡(20)などで、竪穴住居や方形周溝墓などが検出されている。後期になると西側遺跡、浪ノ上遺跡、高井遺跡では大規模な環濠が巡るようになる。

古墳時代

古墳時代は、竪穴住居が白石遺跡、高井遺跡、熊野遺跡、東田遺跡などで、竪穴住居などが確認されている。沖積低地にある東郷廻遺跡(4)や広間遺跡(5)、下河原遺跡(13)、為河原郷遺跡(14)などからも須恵器や土師器が採集されており、低地にも集落が営まれていたようである。古墳は、西側北遺跡から前期古墳が、洗嶋遺跡から中期古墳が確認されている。また、朝倉川左岸には中期の東田古墳がある。全長40m程の前方後円墳である。稲荷山1・2号墳などは中期～後期にかけての方墳と考えられる。

古代以降

古代は、西側遺跡で竪穴住居や土壙などが確認され、西先原遺跡(23)では道路状遺構や柵列が検出されている。

中世では、西側遺跡で集落の跡や多数の地下式土壙墓が確認されている。熊野遺跡(18)では15世紀後半と推測される地下式土壙墓が検出され、西側古墓群(17)では12世紀末～15世紀の蔵骨器や五輪塔などが出土している。中世城館址も多く、高井城址や下条館址、下条堀内古屋敷址(3)、二連木城址、浪之上古屋敷址(19)などがある。

近世では、神ヶ谷遺跡(10)や熊野遺跡、西側遺跡などがある。また吉田藩のお庭焼きである牛川焼窯址(27)からは、陶器や窯道具が出土している。



- | | | | | |
|-----------|------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 中郷遺跡 | 2. 牛川洞穴遺跡 | 3. 下条堀内古屋敷址 | 4. 東郷廻遺跡 | 5. 広間遺跡 |
| 6. 高井古墳群 | 7. 城ノ内遺跡 | 8. 萱野遺跡 | 9. 庄司ヶ下遺跡 | 10. 神ヶ谷遺跡 |
| 11. 桑原遺跡 | 12. 上ノ畑遺跡 | 13. 下河原遺跡 | 14. 為河原郷遺跡 | 15. 洗島遺跡 |
| 16. 西側遺跡 | 17. 西側古墳群 | 18. 熊野遺跡 | 19. 浪之上古屋敷址 | 20. 狭間(森岡)遺跡 |
| 21. 西浦遺跡 | 22. おいほて遺跡 | 23. 西先原遺跡 | 24. 仁連木遺跡 | 25. 東田遺跡 |
| 26. 相生塚古墳 | 27. 牛川焼窯址 | 28. 眼鏡下池北遺跡 | 29. 乗小路A~D古墳群 | 30. キジ山古墳群 |

第3図 中郷遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過

今回発掘調査を行った中郷遺跡のある豊橋市牛川町は、市中心部から4kmの位置にある交通の便のよい地域であり、宅地開発等が進んでいる地区である。この地区に対しては、市教育委員会が昭和61年度と平成元年度に分布調査を行って遺跡範囲を推定し、さらに平成2年度と平成9年度には範囲確認調査を実施して、遺跡の範囲を確定している。牛川町の周辺部は近年、土地区画整理や宅地開発が進んでいるが、牛川町の中心部は江戸時代から続く、道が細い旧来のままの集落であった。このため、平成7年度から豊橋牛川西部土地区画整理組合によって約43haに及ぶ土地区画整理事業が計画・実施され、道路などが整備され始めている。

中郷遺跡の発掘調査は、この土地区画整理事業に伴うものである。土地区画整理地内には、西側遺跡、中郷遺跡、洗嶋遺跡、東側遺跡などの遺跡が8遺跡存在している。遺跡の発掘調査は平成14年度の西側遺跡第1次調査から始まり、しばらくは西側遺跡の調査が続いた。中郷遺跡の調査は、土地区画整理事業に伴うものでは西側遺跡に次ぐものとなった。

2. 調査の方法

発掘調査は、基本的に切り土によって遺跡を破壊する部分を対象としている。今回の発掘調査は道路部分について行っている。調査面積は1,400㎡である。調査区の設定については、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、この国土座標に合わせて中郷遺跡の北西隅を起点にして、10mグリッドを設定した。この起点より西から東にA～Z、北から南に1～17というように名付け、その交点を地区名としている。

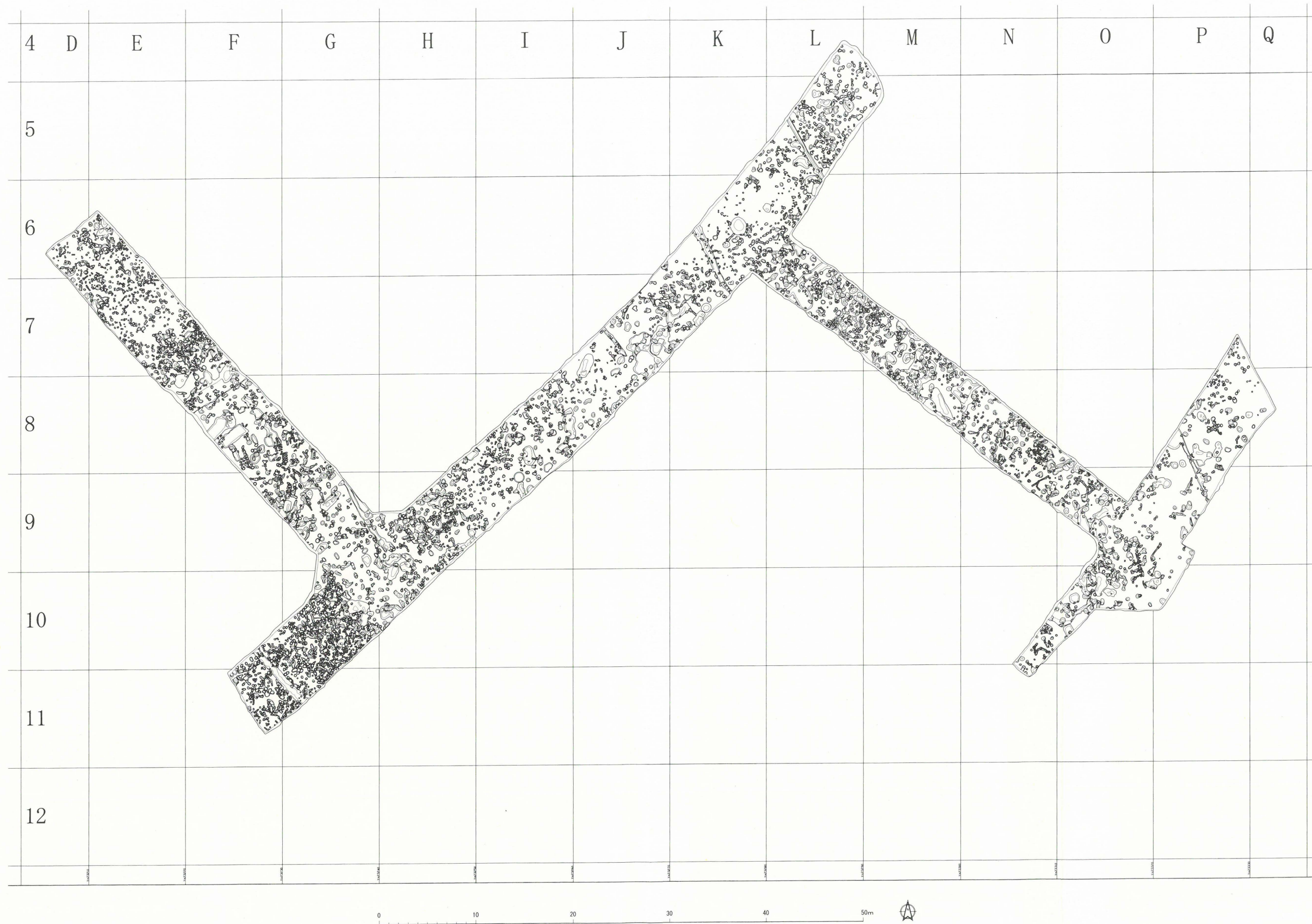
発掘調査の手順は表土を重機を用いて掘削し、後は人力で掘り下げた。具体的な作業順序は以下のとおりである。

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
3. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成したり、出土状況写真を撮影する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、遺構全体図を完成させる。
5. ラジコンヘリを用いて調査区の全体写真を撮影する。

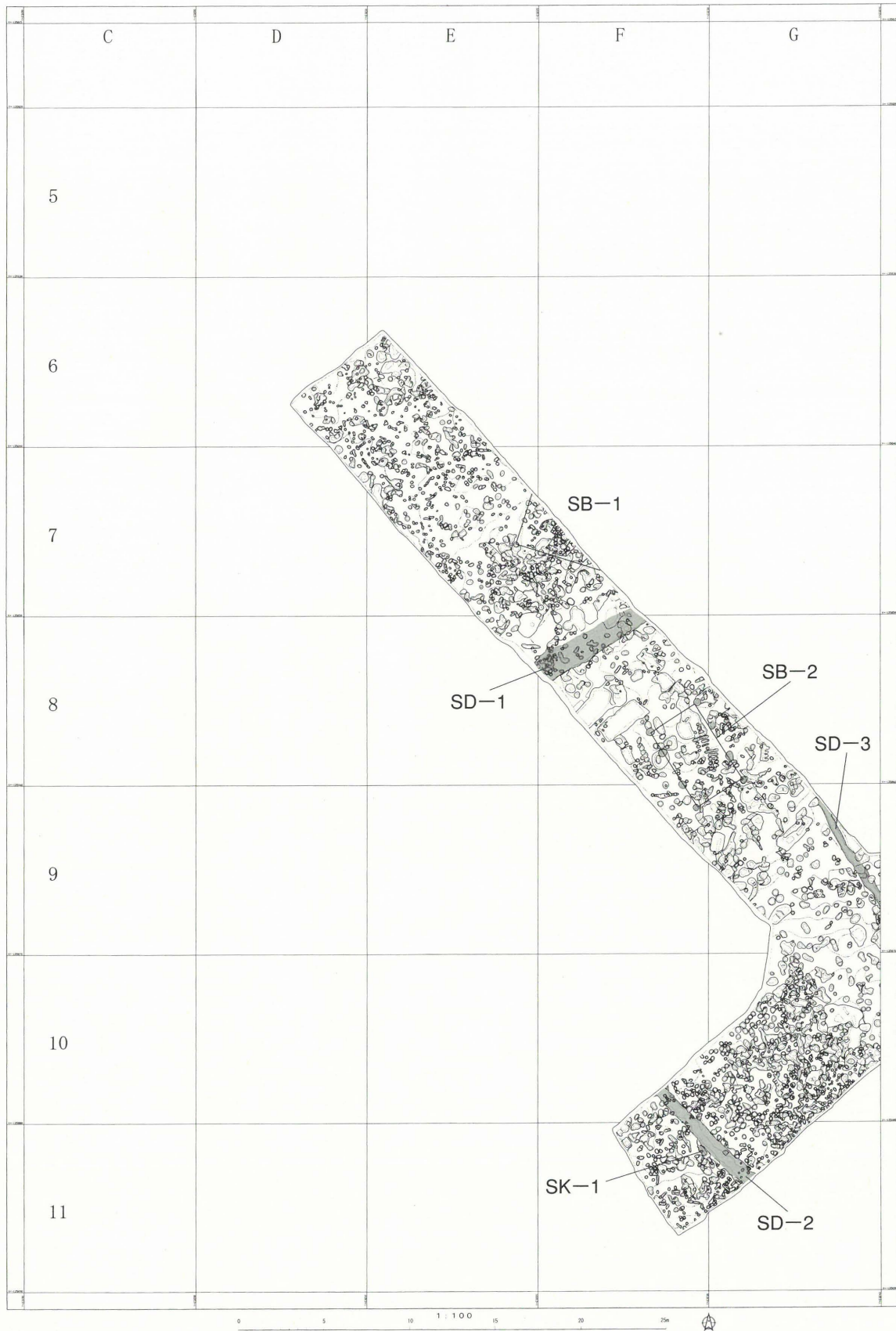
こうして、平成16年12月1日～平成17年2月27日の期間にわたり発掘調査を行っている。なお、この発掘調査は豊橋市が独自に実施した緊急雇用対策事業の指定を受けており、新規に失業者を作業員として雇用している。



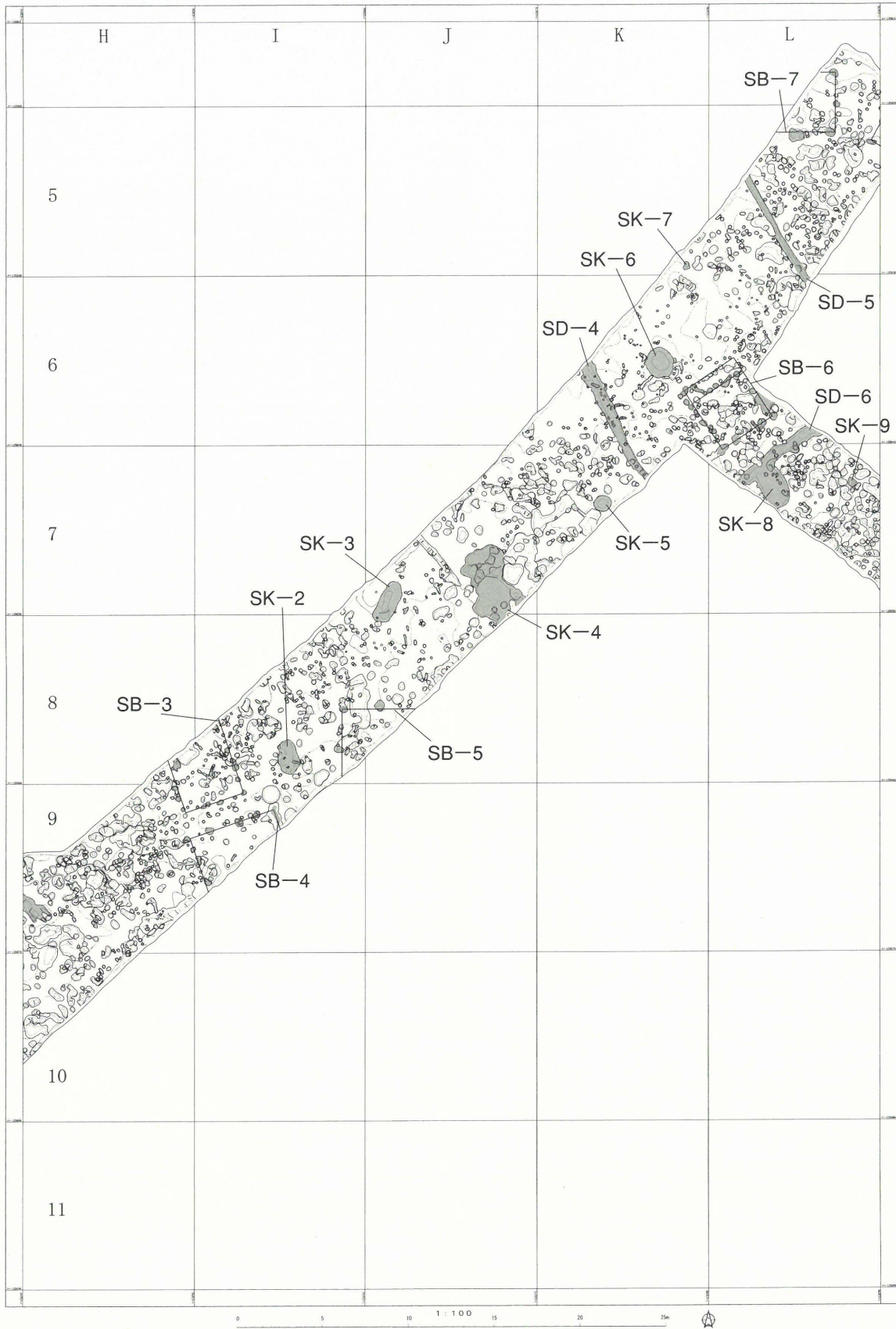
第4図 調査区位置図 (1/2,500)



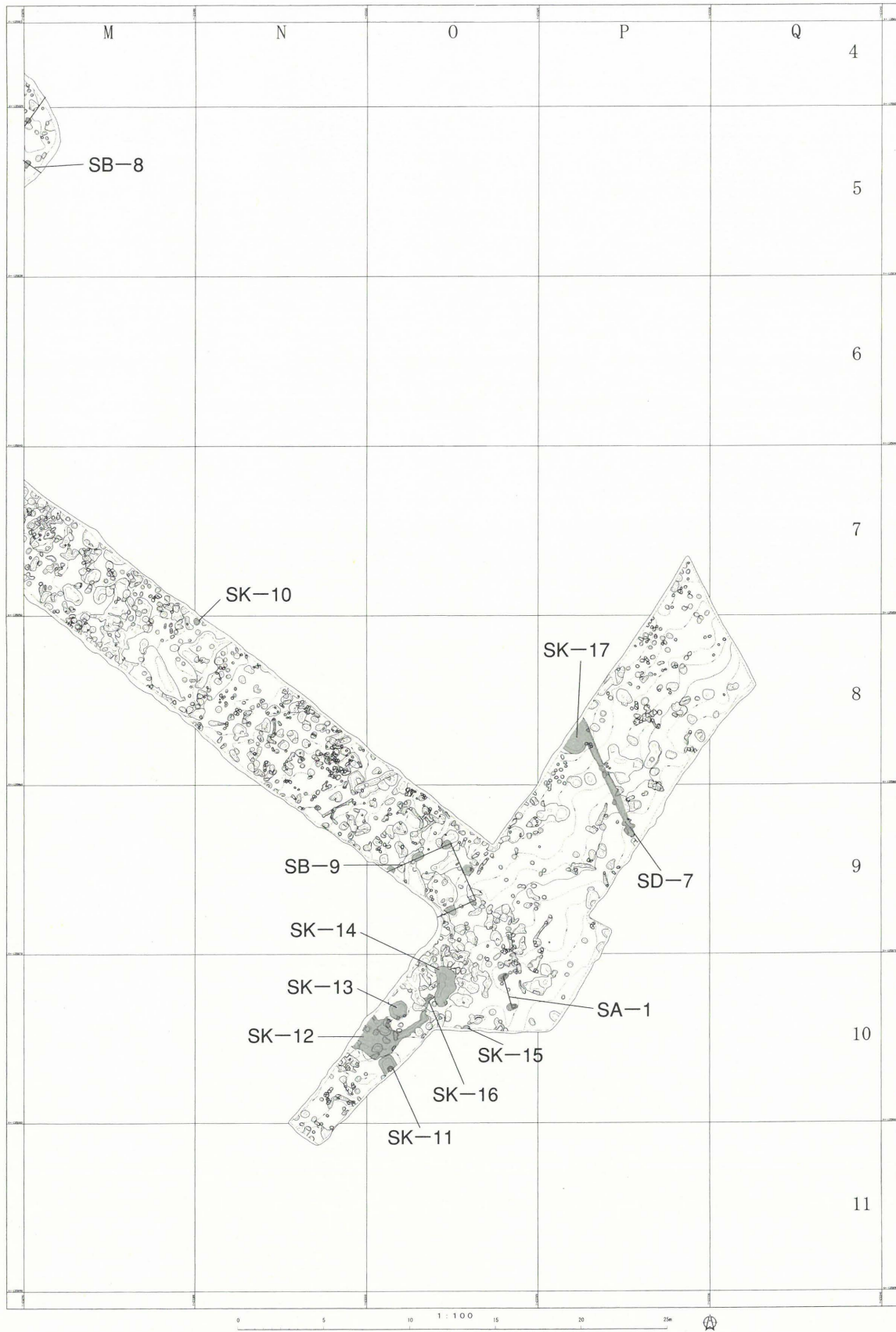
第5図 調査区全体図 (1/400)



第6図 遺構位置図-1 (1/350)



第7図 遺構位置図-2 (1/350)



第8図 遺構位置図-3 (1/350)

第3章 遺構

遺構は、掘立柱建物（SB）9棟、柵（SA）1列、溝（SD）7条、土壙（SK）多数等が検出されている。ここでは各遺構を種類ごとに説明し、土壙に関しては遺物を出土したものを中心に記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値であり、掘立柱建物、塀の規模計測値は柱穴の中心間の測定値である。

1. 掘立柱建物（第9・10図）

掘立柱建物は、側柱建物が8棟、庇付側柱建物が1棟確認されている。この他に、柱穴と考えられる土壙も存在しており、9棟以上の建物があったものと思われる。

SB-1（第9図）

E・F-7区で検出された2間以上×1間以上の掘立柱建物で、大半は調査区外に延びている。主軸方位はN-72°-Wである。規模は桁行4.8m以上、梁間2.8m以上であり、柱間は桁行でP1～P2が1.5m、P2～P3が1.6m、梁間でP1～P4が1.5mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1はほぼ円形の柱穴で径は32cm、深さは44cm、埋土は灰褐色砂質土である。P2は他の土壙と重複しているが長径30cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは56cm、埋土は淡茶褐色砂質土である。P3も他の土壙と重複しているが長径50cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは36cm、埋土は灰褐色砂質土である。P4は楕円形で長径32cm、深さ24cm、埋土は灰褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

SB-2（第9図）

F・G-8・9区で検出された3間×1間の掘立柱建物である。主軸方位はN-31°-Wである。規模は桁行5.2m、梁間3.1mであり、柱間は桁行でP1～P2が1.4m、P2～P3が2.2m、P3～P4が1.5m、梁間はP1～P5が3.1mである。

柱穴の規模及び埋土は、P1はほぼ円形の柱穴で径は48cm、深さは24cmで埋土は灰褐色砂質土である。P2は楕円形の柱穴で長径は50cm、深さは33cmで埋土は黒灰色砂質土である。P3はほぼ円形の柱穴で径は47cm、深さは16cmで埋土は黒灰色砂質土である。P4は円形の柱穴で径は36cm、深さは25cmで埋土は黒灰色砂質土である。P5は円形の柱穴で径は41cm、深さは32cmで埋土は黒灰色砂質土である。P6は他の土壙と重複しているが径35cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは30cm、埋土は黒灰色砂質土である。P7も他の土壙と重複しているが長径50cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは30cm、埋土は黒灰色砂質土である。P8は楕円形で長径42cm、深さ12cm、埋土は黒灰色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

SB-3 (第9図)

H・I-8・9区で検出された6間以上×5間の掘立柱建物で、調査区外に延びている。柱穴が小さく不揃いなため、簡易な構造の建物と思われる。主軸方位はN-18°-Wである。規模は桁行4.4m以上、梁間3.6mであり、柱間は桁行でP1～P2が0.8m、P2～P3が0.4m、P3～P4が0.6m、P4～P5が0.6m、梁間はP5～P6が0.8m、P6～P7が0.6m、P7～P8が0.7m、P8～P9が0.8m、P9～P10が0.6mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は他の土壌と重複しているが径20cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは18cm、埋土は灰褐色砂質土である。P2は楕円形の柱穴で長径は44cm、深さは34cmで、埋土は灰褐色砂質土である。P3は他の土壌と重複しているが長径35cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは15cm、埋土は灰褐色砂質土である。P4も他の土壌と重複しているが径30cm程のほぼ円形の柱穴と考えられ、深さは54cm、埋土は灰褐色砂質土である。P5は円形で径25cm、深さ17cm、埋土は灰褐色砂質土である。P6は楕円形の柱穴で長径は21cm、深さは34cmで、埋土は灰褐色砂質土である。P7は楕円形の柱穴で長径は32cm、深さは24cm、埋土は灰褐色砂質土である。P8は楕円形の柱穴で長径は44cm、深さは49cm、埋土は灰褐色砂質土である。P9は楕円形の柱穴で長径は24cm、深さは14cm、埋土は灰褐色砂質土である。P10は楕円形の柱穴で長径は33cm、深さは52cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P11は楕円形の柱穴で長径は30cm、深さは25cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P12は楕円形の柱穴で長径は40cm、深さは27cm、埋土は灰褐色砂質土である。P13は楕円形の柱穴で長径は32cm、深さは28cm、埋土は灰褐色砂質土である。P14は他の土壌と重複しているが長径30cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは16cm、埋土は灰褐色砂質土である。P15はほぼ円形の柱穴で、径は15cm、深さは15cm、埋土は灰褐色砂質土である。P16は他の土壌と重複しているが径15cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは15cm、埋土は灰褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

SB-4 (第9図)

H・I-9区で検出された4間×2間以上の掘立柱建物で、調査区外に延びている。主軸方位はN-77°-Eである。規模は桁行5.4m、梁間3.1m以上であり、柱間は桁行でP1～P2が1.2m、P2～P3が1.1m、P3～P4が1.7m、P4～P5が1.4m、梁間ではP5～P6が1.4m、P6～P7が1.2mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は布掘りされたのか調査区外に細長く延びる柱穴で、長さは1.4m以上、深さは27cm、埋土は黒灰色砂質土である。P2は長径48cmの楕円形の柱穴で、深さは23cm、埋土は灰褐色砂質土である。P3も他の土壌と重複しているものと思われるが、長径55cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは48cm、埋土は灰褐色砂質土である。P4は楕円形で長径52cm、深さ31cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P5は長径47cmの楕円形気味の柱穴で、深さは17cm、埋土は淡茶褐色砂質土である。P6は他の土壌と重複しているのか不整形の柱穴で、長径は68cm、深さは41cm、埋土は灰褐色砂質土である。P7も他の土壌と重複しているのか不整形なもので、長径は49cm、深さは37cm、埋土は灰褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

S B - 5 (第10図)

I・J-8区で検出された1間以上×1間以上の掘立柱建物で、大半は調査区外に延びている。主軸方位はN-1°-Eである。規模は桁行3.9m以上、梁間3.9m以上であり、柱間は桁行でP1～P2が2.4m、梁間でP2～P3が2.1mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は他の土壙と重複しているが長径50cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは38cm、埋土は灰褐色砂質土である。P2も他の土壙と重複しているが長径55cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは20cm、埋土は灰褐色砂質土である。P3は方形気味の柱穴で、長径56cm、深さ32cm、埋土は灰褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

S B - 6 (第10図)

K・L-6・7区で検出された7間×3間の庇付き掘立柱建物である。柱穴の配列が不揃いなため、簡易な構造の建物と思われる。主軸方位はN-39°-Wである。規模は桁行3.2m、庇部を含めると4.0m、梁間3.5mであり、柱間は桁行でP3～P4が0.6m、P4～P5が0.6m、P5～P6が0.6m、P6～P7が0.7m、P7～P8は0.7m、梁間はP8～P22が1.0m、P22～P23が1.4m、P23～P14が1.1mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は他の土壙と重複しているが長さ30cm程の方形の柱穴と考えられ、深さは39cm、埋土は灰褐色砂質土である。P2は楕円形の柱穴で長径は47cm、深さは41cm、埋土は灰褐色砂質土である。P3は楕円形の柱穴で長径は31cm、深さは41cm、埋土は灰褐色砂質土である。P4は他の土壙と重複しているが長径20cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは40cm、埋土は灰褐色砂質土である。P5は楕円形の柱穴で長径は52cm、深さは38cm、埋土は灰褐色砂質土である。P6は楕円形の柱穴で長径は47cm、深さは11cm、埋土は灰褐色砂質土である。P7は径210cmのほぼ円形の柱穴で、深さは14cm、埋土は灰褐色砂質土である。P8は他の土壙と重複しているが、長径80cm程の楕円形の柱穴と思われ、深さは16cm、埋土は淡茶褐色砂質土である。P9は円形の柱穴で径は16cm、深さは12cmで、埋土は灰褐色砂質土である。P10は楕円形の柱穴で長径は36cm、深さは37cm、埋土は灰褐色砂質土である。P11はほぼ円形の柱穴で径は28cm、深さは13cm、埋土は灰褐色砂質土である。P12は一部を調査区外で欠くが楕円形の柱穴と思われ、長径は48cm、深さは58cm、埋土は黒灰色砂質土である。P13は他の土壙と重複しており不明瞭である。P14は楕円形の柱穴で長径は44cm、深さは15cm、埋土は灰褐色砂質土である。P15は他の土壙と重複しているが、本来は径40cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは8cm、埋土は灰褐色砂質土である。P16は楕円形の柱穴で長径は72cm、深さは13cm、埋土は灰褐色砂質土である。P17は楕円形の柱穴で長径は28cm、深さは13cm、埋土は灰褐色砂質土である。P18は径39cmの方形の柱穴で、深さは16cm、埋土は灰褐色砂質土である。P19は楕円形の柱穴で長径は32cm、深さは13cm、埋土は灰褐色砂質土である。P20は楕円形の柱穴で長径は29cm、深さは42cm、埋土は灰褐色砂質土である。P21は他の土壙と重複しているが径16cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは41cm、埋土は灰褐色砂質土である。P22は他の土壙と重複しているが径65cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは15cm、埋土は灰褐色砂質土である。P23は他の土壙と重複しているが径48cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは11cm、埋土は灰

褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

SB-7 (第10図)

L-4・5区で検出された1間以上×1間以上の掘立柱建物で、大半は調査区外に延びている。主軸方位はN-1°-Eである。規模は桁行2.8m以上、梁間3.5mであり、柱間は桁行でP1～P2が1.8m、梁間でP2～P3が1.7m、P3～P4が1.8mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は他の土壌と重複しているが長径60cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは38cm、埋土は淡茶褐色砂質土である。P2も他の土壌と重複しているが長径65cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは21cm、埋土は灰褐色砂質土である。P3は方形気味の柱穴で、長径40cm、深さ16cm、埋土は灰褐色砂質土である。P4は他の土壌と重複しているが長径50cm程の楕円形の柱穴と考えられ、深さは32cm、埋土は灰褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

SB-8 (第10図)

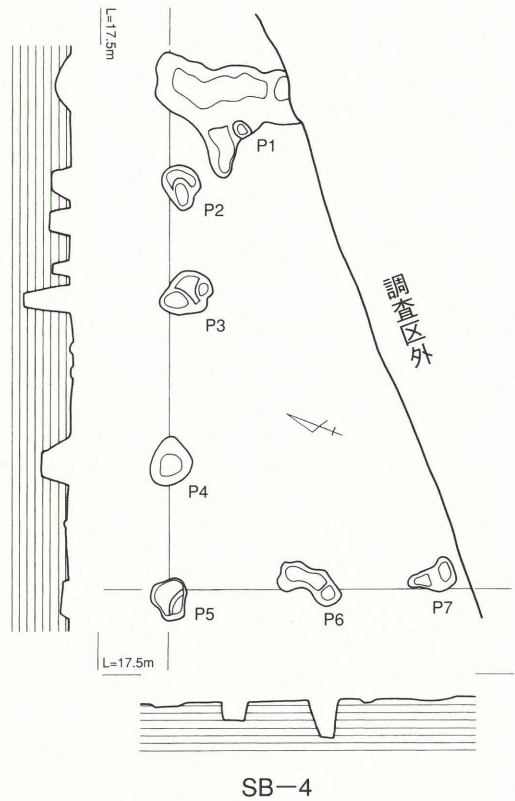
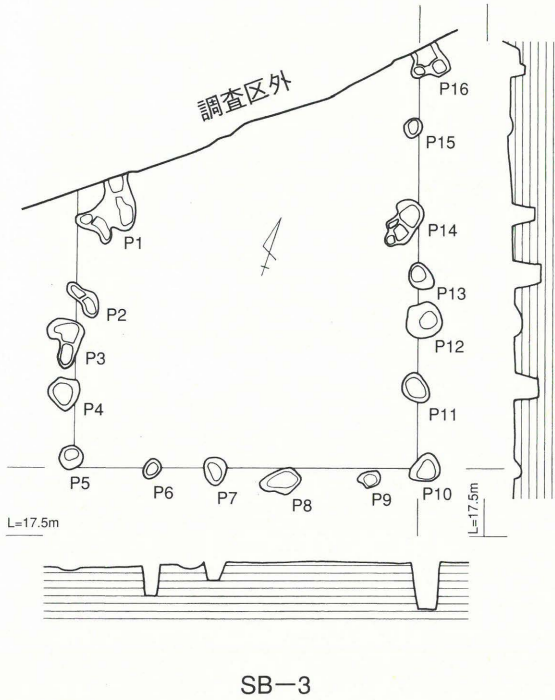
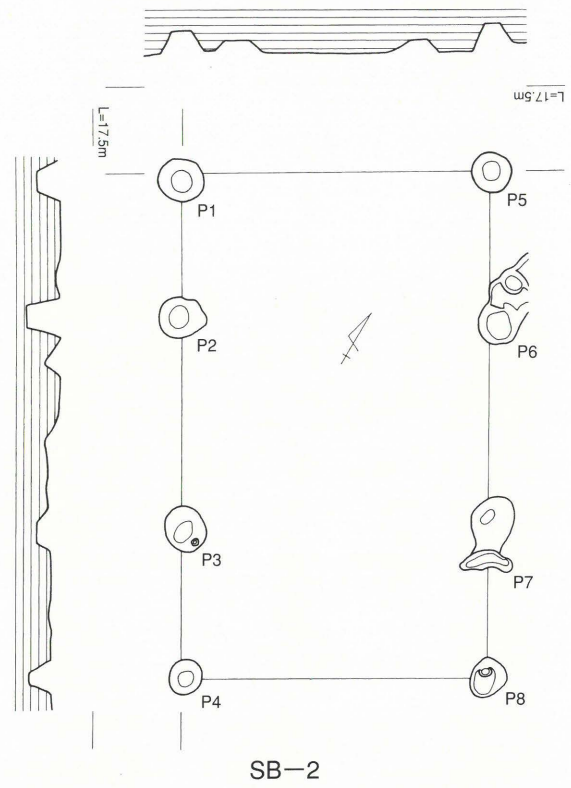
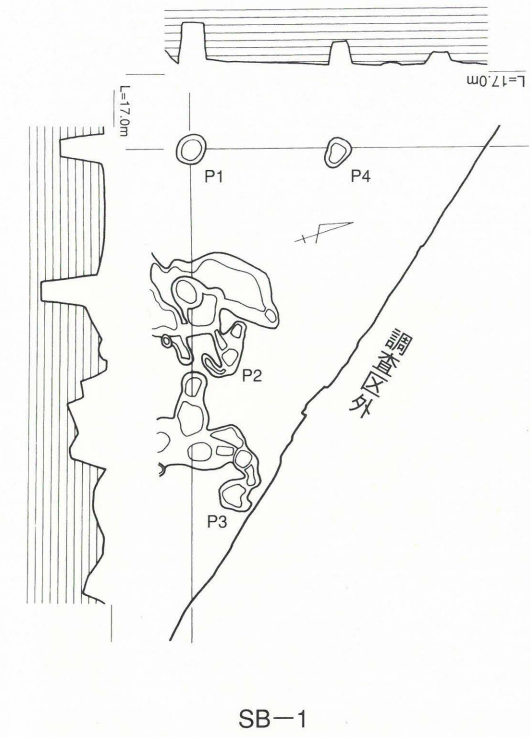
L・M-4・5区で検出された1間以上×1間以上の掘立柱建物で、大半は調査区外に延びている。主軸方位はN-31°-Eである。規模は桁行3.0m以上、梁間1.8m以上であり、柱間は桁行でP1～P2が1.6m、梁間でP1～P3が1.6mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は楕円形の柱穴で長径は59cm、深さは14cm、埋土は灰褐色砂質土である。P2は長径36cmの台形気味の柱穴で、深さは36cm、埋土は灰褐色砂質土である。P3は長径40cmの楕円形の柱穴で、深さは16cm、埋土は灰褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

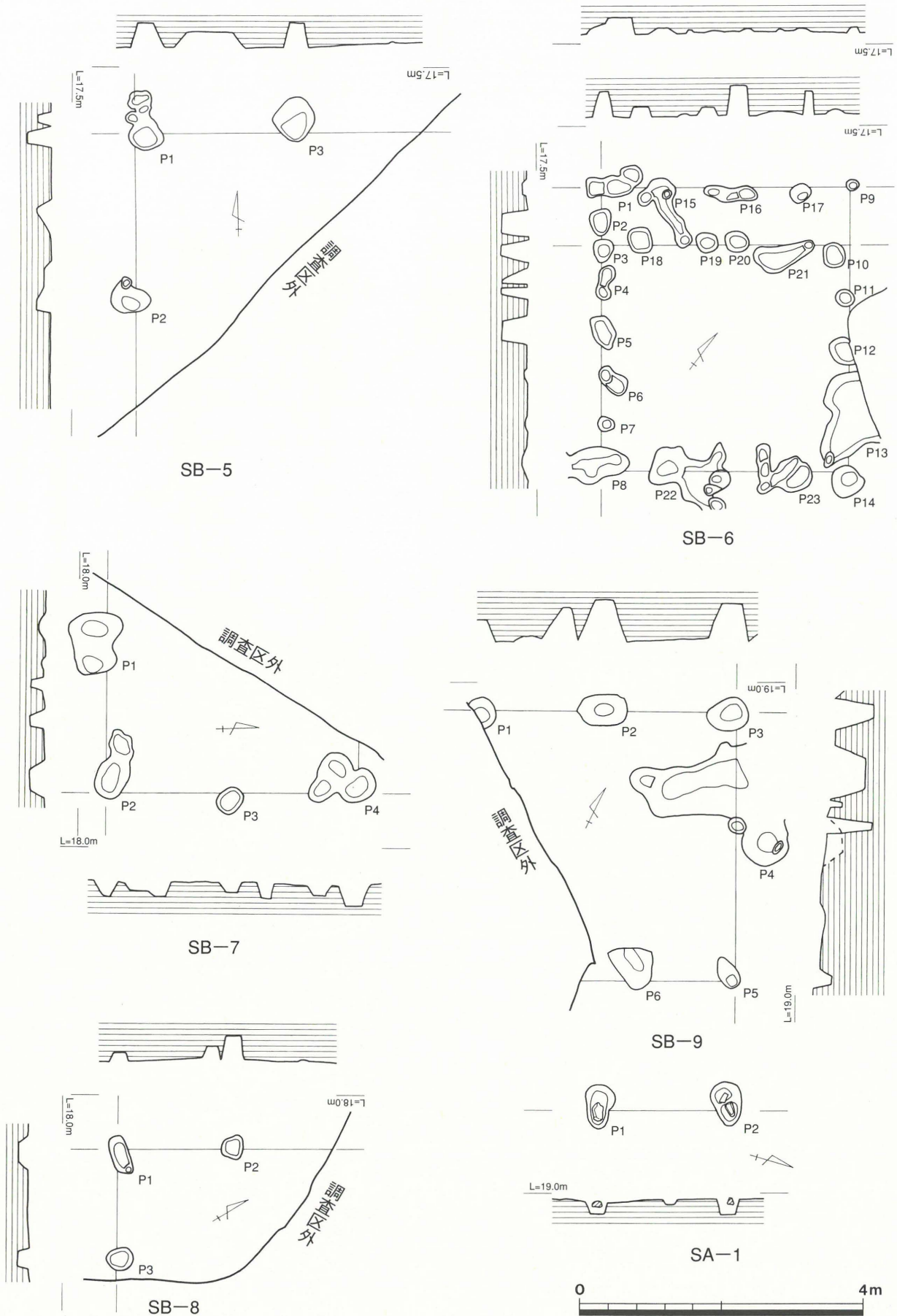
SB-9 (第10図)

O-9区で検出された2間以上×2間の掘立柱建物で、大半は調査区外に延びている。主軸方位はN-63°-Eである。規模は桁行3.7m以上、梁間3.9mであり、柱間は桁行でP1～P2が1.8m、P2～P3で1.8m、梁間でP3～P4が1.9m、P4～P5が2.0mとなる。

柱穴の規模及び埋土は、P1は調査区外で一部を欠くが、径44cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは28cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P2は他の土壌と重複しているが長径72cm程の楕円形の柱穴で、深さは60cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P3は楕円形の柱穴で、長径60cm、深さ52cm、埋土は灰褐色砂質土である。P4は他の土壌と重複しているが径60cm程の円形の柱穴と考えられ、深さは28cm、埋土は灰褐色砂質土である。P5は他の土壌と重複しているが長径50cm程の楕円形の柱穴で、深さは27cm、埋土は淡茶褐色砂質土である。P6は他の土壌と重複しているが長径60cm程の楕円形の柱穴と思われ、深さは27cm、埋土は淡茶褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。



第9図 遺構実測図-1 (1/80)



第10図 遺構実測図-2 (1/80)

2. 柵 (第10図)

柱穴が2基並ぶものがあり、建物とならないため柵とした。1列のみ確認されている。

SA-1 (第10図)

O-10区で検出された1間の柵で、主軸方位はN-18°-Wである。規模は柱間で1.8mとなる。柱穴の規模及び埋土は、P1は楕円形の柱穴で長径は64cm、深さは29cmで、柱穴内に平坦面を上にして長さ32cmの石が置かれている。埋土は灰褐色砂質土である。P2は長径64cmの楕円形の柱穴で、深さは23cmで、柱穴内に長さ20cmの石と長さ15cmの石が平坦面を上にして置かれている。埋土は灰褐色砂質土である。各柱穴から遺物は出土しておらず、建物の時期は不明である。

3. 溝 (第11・12図)

溝は、7条が確認されている。

SD-1 (第11図)

E・F-7・8区で検出された溝で、東北東-西南西方向に直線的に調査区外へ延びている。溝の端は他の土壌等で壊されている。規模は検出長6.5m、最大幅1.6mで、溝の床面は平坦で、深さは最大で20cmと幅や深さは比較的一定である。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物は瓦破片が2点のみで、遺構の時期ははっきりしないが、おそらく近世のものであろう。

SD-2 (第11図)

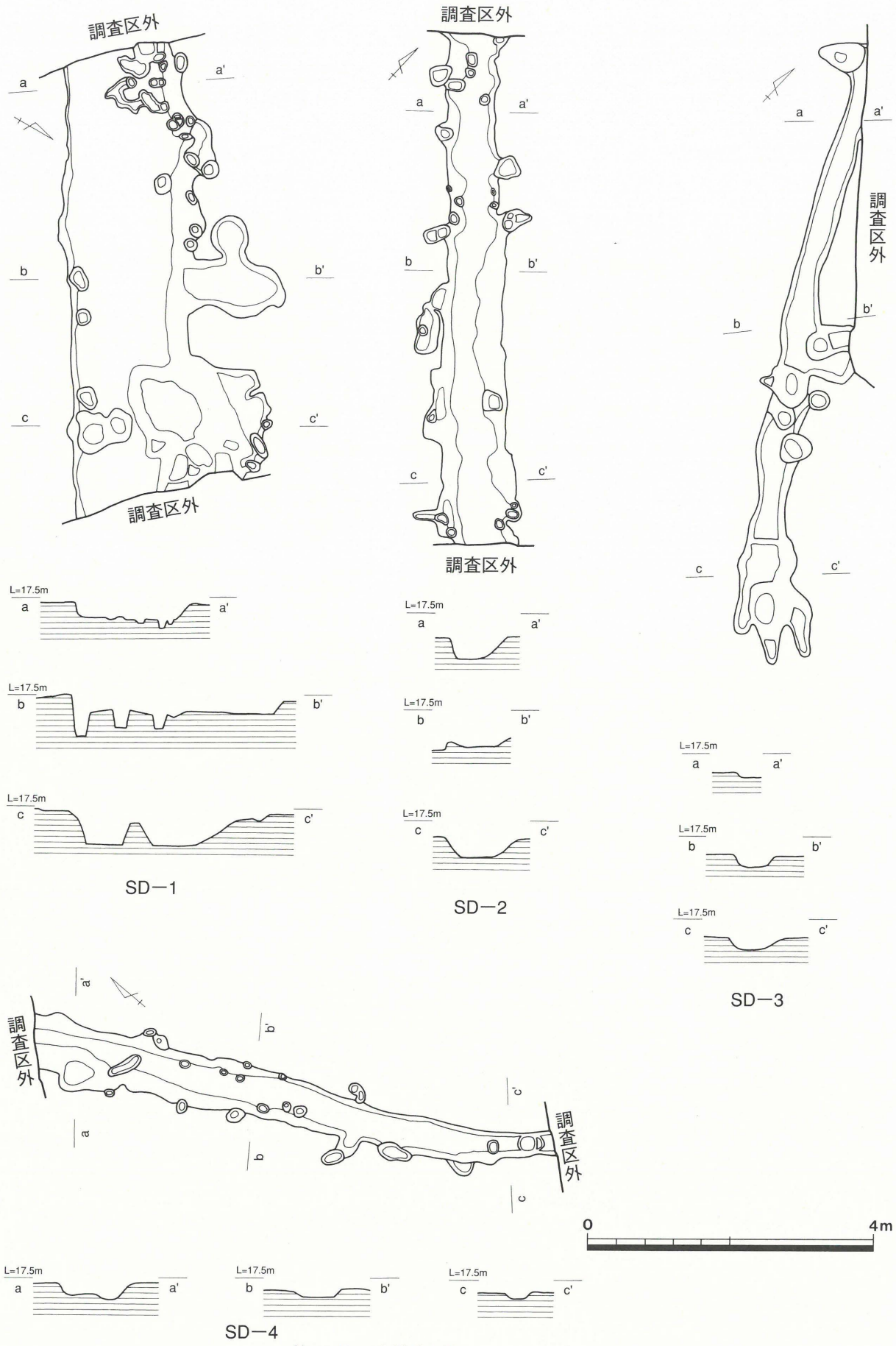
F・G-10・11区で検出された溝で、北西-南西方向に直線的に調査区外へ延びている。溝の端は一部が他の土壌等で壊されている。規模は検出長7.3m、最大幅0.9mで、溝の床面は平坦で、深さは最大で28cmと、幅や深さは比較的定まっている。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器(碗・播鉢)、土師器(鍋)、瓦、砥石があり、溝の帰属時期は18世紀後葉のものと思われる。

SD-3 (第11図)

G・H-9区で検出された溝で、北北西-南南東に調査区外から比較的直線的に延びている。溝は所々が他の土壌等で壊されている。規模は検出長8.8m、最大幅0.6m、溝の床面は緩やかに湾曲し、深さは最大で16cmである。溝は幅や深さが比較的定まっている。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器(碗・播鉢)があり、溝の帰属時期は18~19世紀頃のものと思われる。

SD-4 (第11図)

K-6・7区で検出された溝で、北北西-南南東方向に緩やかに湾曲して調査区外へ延びている。



第11図 遺構実測図-3 (1/80)

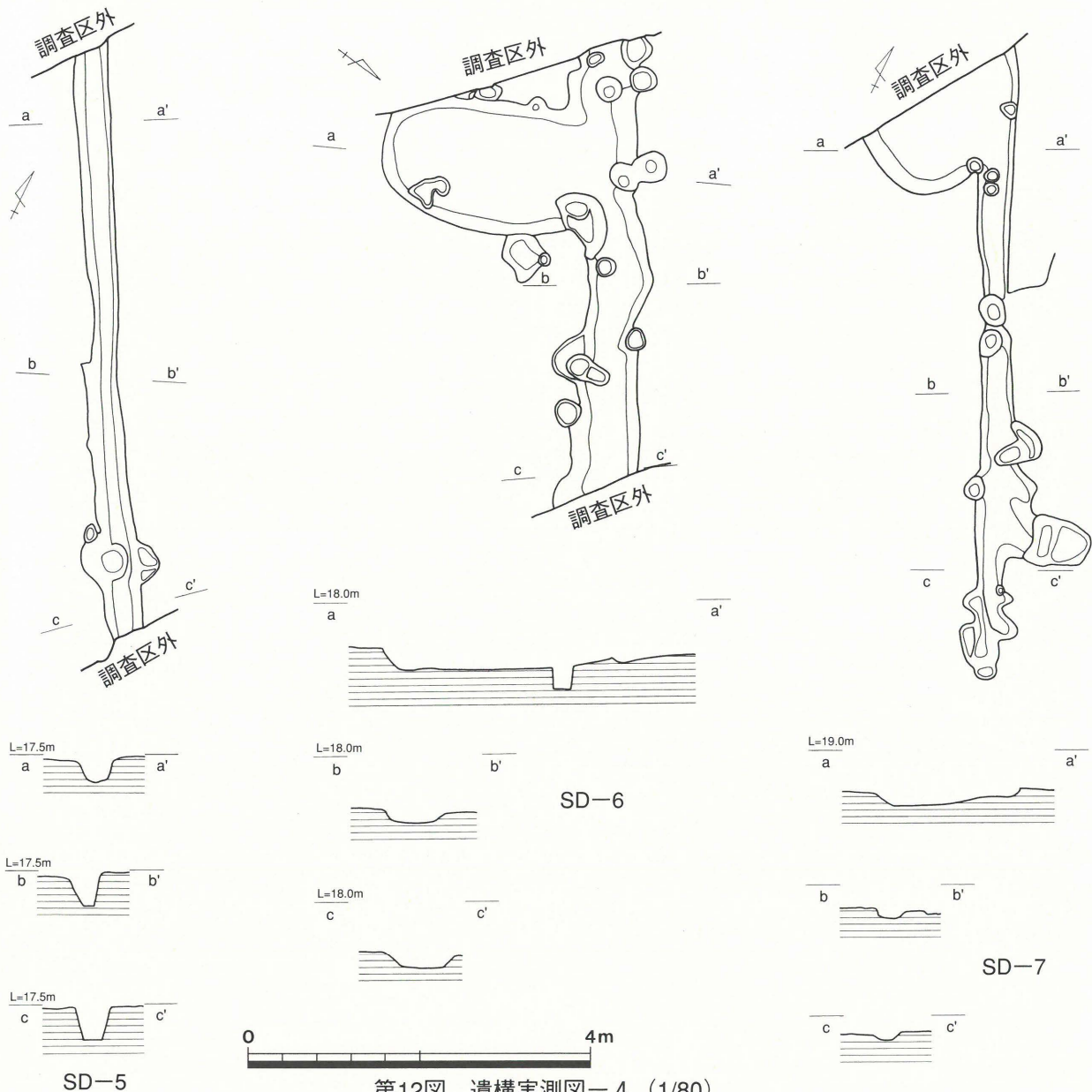
溝の端は他の土壌等で一部が壊されている。規模は検出長7.6m、最大幅0.8m、溝の床面は平坦で、深さは最大で17cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物は無く、溝の時期は不明である。

SD-5 (第12図)

L-5・6区で検出された溝で、北西-南東方向に直線的に調査区外へ延びている。規模は検出長7.0m、最大幅0.4m、溝の床面は平坦で、深さは最大で40cmである。溝の幅や深さは比較的一定である。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物には磁器(碗)、土人形があり、溝の時期は近代のものと考えられる。

SD-6 (第12図)

L-6・7区で検出された溝で、北東-南西方向に直線的に調査区外へ延びている。溝の端はSK



- 8等の土壙で一部が壊されている。規模は検出長5.2m、最大幅0.8m、溝の床面は平坦で、深さは最大で20cmである。溝の幅や深さは比較的一定である。埋土は茶褐色砂質土である。出土遺物は無く、溝の時期は不明である。

SD-7 (第12図)

P-8・9区で検出された溝で、北北西-南南東方向へ直線的に延びている。溝の端は他の土壙等で壊されている。規模は検出長7.6m、最大幅0.4m、溝の床面は平坦で、深さは最大で12cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。溝の幅や深さは比較的一定である。出土遺物には土師器(皿)があり、溝の時期ははっきりしないが、おそらく近世のものと考えられる。

4. 土壙 (第13・14図)

土壙は、検出長4mを越える巨大な土壙をはじめ、柱穴状の小さなものまで、様々な形態のものが調査区全体から多数検出されている。また、風倒木痕も数カ所で確認されている。ここでは、遺物が出土している土壙を中心に述べるものとする。

SK-1 (第14図)

F-11区で検出された土壙で、他の土壙と重複しているが平面形は長方形に近く、規模は長径72cm、短径30cm、深さは24cmである。埋土は淡茶褐色砂質土である。出土遺物には石器(剥片)があり、土壙は縄文時代のものと思われる。

SK-2 (第13図)

I-8区で検出された土壙で、平面形は楕円形、規模は長径2.0m、短径1.2m、深さは40cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物は無く、時期は不明である。

SK-3 (第13図)

J-7・8区で検出された土壙で、平面形は楕円形、規模は長径2.5m、短径1.0m、深さは72cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代晩期頃のものと思われる。

SK-4 (第13図)

J-7・8区で検出された不整形な土壙であり、2基以上の土壙が重複している可能性がある。規模は長径4.0m、短径2.6m、深さは21cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物には無く、時期は不明である。

SK-5 (第13図)

K-7区で検出された土壙で、平面形はほぼ円形、規模は径1.0m、深さは32cmである。埋土は黒

灰色砂質土である。出土遺物は無く、時期は不明である。

SK-6 (第13図)

K-6区で検出された土壙で、平面形はほぼ円形、規模は径1.7m、深さは2.0mである。埋土は黒灰色砂質土である。井戸の可能性も考えたが、井戸としては比較的浅い位置から底面が検出されたため土壙とした。出土遺物は無く、時期は不明である。

SK-7 (第14図)

K-5区で検出された土壙で、平面形は不整形、規模は長径50cm、短径41cm、深さは26cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代前期頃のものと思われる。

SK-8 (第13図)

L-7区で検出された土壙で、北端がSD-6と重複している。平面形は楕円形と思われ、規模は長径約3.0m、短径1.6m、深さは24cmである。埋土は黒灰色砂質土である。出土遺物は無く、時期は不明である。

SK-9 (第14図)

L-7区で検出された土壙で、平面形は楕円形、規模は長径59cm、短径46cm、深さは16cmである。埋土は淡茶褐色砂質土である。出土遺物には石製品・玉の可能性のある石があり、これが玉とすると土壙の時期は縄文時代と思われる。

SK-10 (第14図)

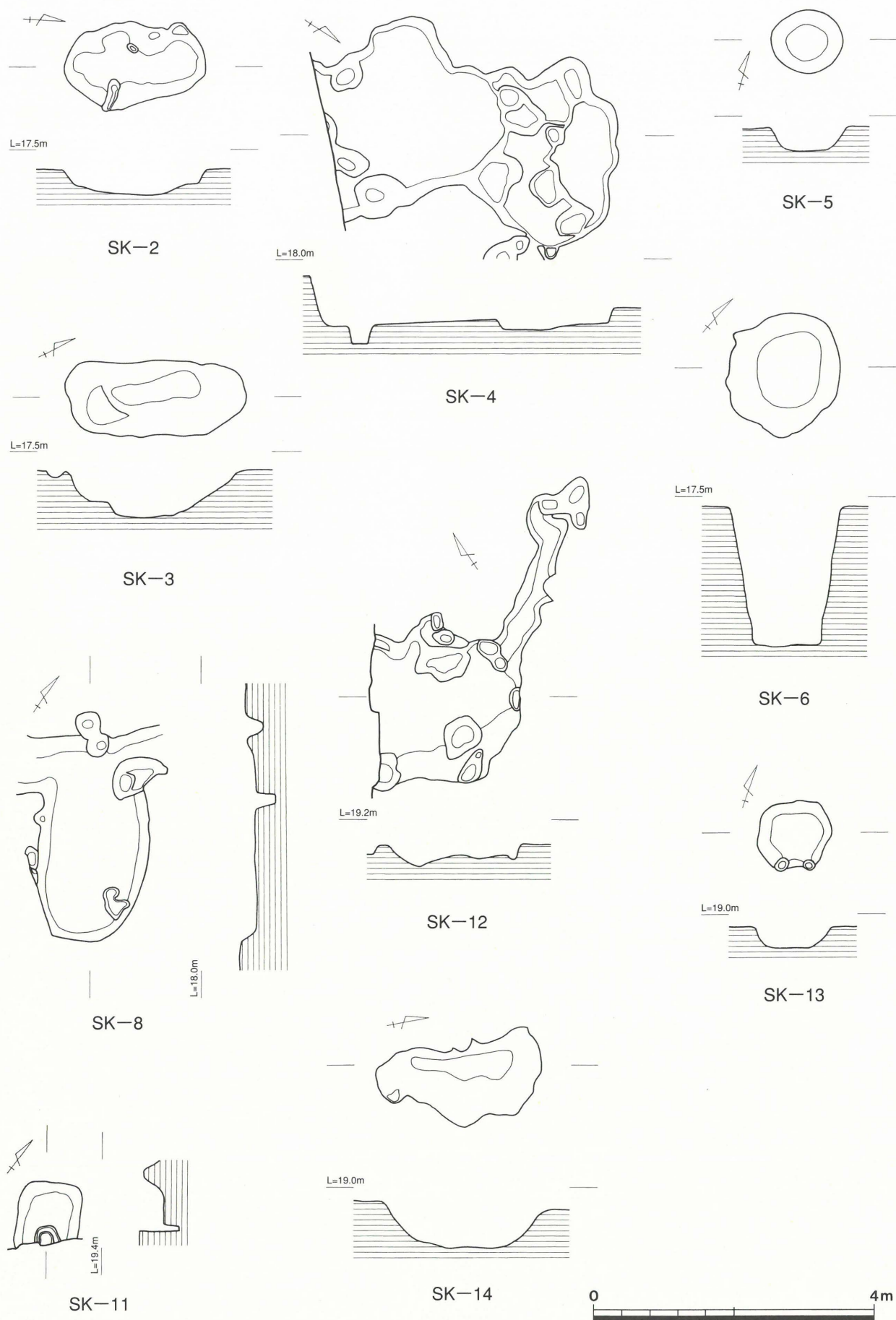
N-8区で検出された土壙で、平面形は円形に近く、規模は径26cm、深さは41cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には磁器(碗)があり、土壙の時期は近世～近代と思われる。

SK-11 (第13図)

O-10区で検出された土壙で、調査区外で一部を欠くが平面形は長方形に近く、規模は長径1.0m以上、短径0.9m、深さは40cmである。埋土は暗灰褐色砂質土で、炭なども混ざっている。出土遺物には磁器(碗)があり、土壙の時期は近代と思われる。

SK-12 (第13図)

O-10区で検出された土壙で、調査区外で一部を欠く。中心となる土壙の平面形は円形と思われるが、そこから溝状に細長い土壙が延びている。中心となる土壙の規模は長径2.0m以上、短径2.2m、深さは16cmである。埋土は灰褐色砂質土である。出土遺物には土師器(皿)があり、土壙の時期は近世と思われる。



第13図 遺構実測図一5 (1/80)

SK-13 (第13図)

O-10区で検出された土壌で、平面形は円形に近く、規模は径1.0m、深さは28cmである。土壌の南側に径20cm程の円形土壌が2基伴っている。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器(蚊遣り)、土師器(鍋)があり、土壌の時期は近世と思われる。

SK-14 (第13図)

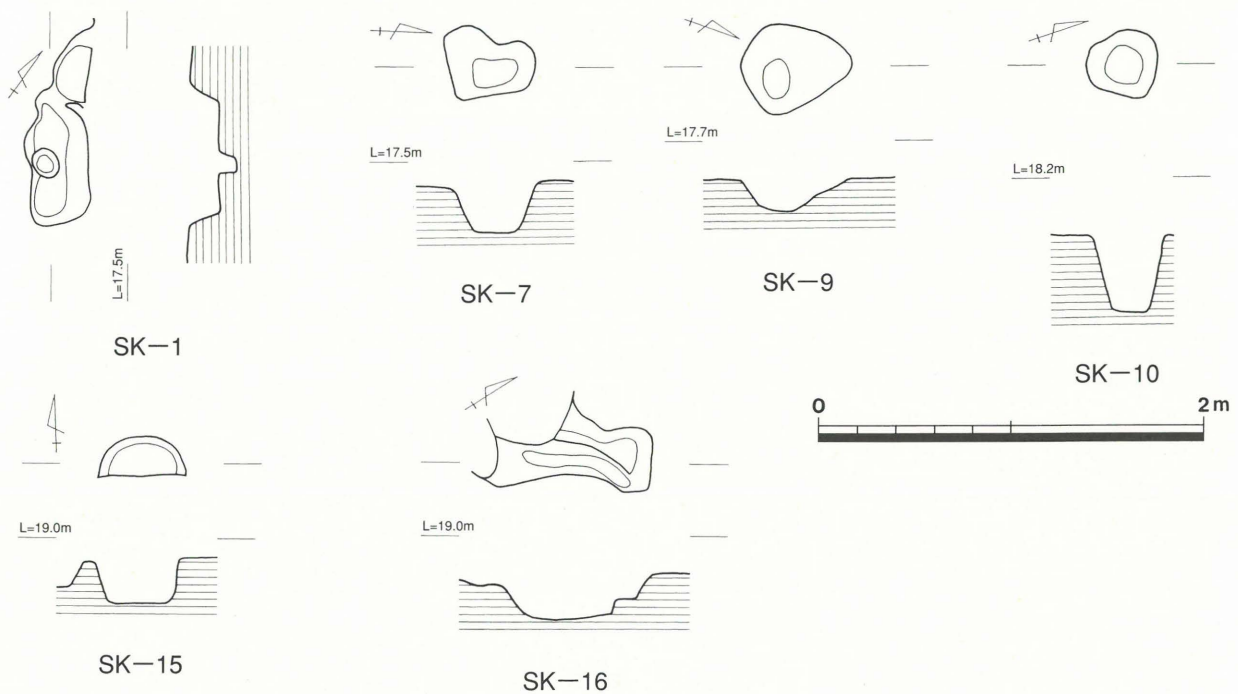
O-10区で検出された土壌で、平面形はほぼ楕円形、規模は長径2.4m、短径1.20m、深さは64cmである。埋土は黒灰色砂質土で、炭が若干混じる。出土遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代晩期頃のものと思われる。

SK-15 (第14図)

O-10区で検出された土壌で、調査区外で一部を欠くが平面形は円形の土壌と思われる。土壌の規模は径46cm以上、深さは24cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器、陶器(碗)があり、土壌の時期は18世紀頃と思われる。

SK-16 (第14図)

O-10区で検出された土壌で、平面形は不整形で、他の土壌に西端が壊されている。規模は長径80cm以上、短径28cm、深さは24cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代晩期頃のものと思われる。



第14図 遺構実測図-6 (1/40)

第4章 遺物 (第15・16図、第1表)

今回の調査で出土した遺物は、極端に少なく縄文土器、須恵器・陶器・磁器・土師器・瓦・鉄製品が、コンテナ箱(34×54×20cm)に1箱未満出土したのみであった。量的には中近世の土師器が比較的に目立って出土している。以下、遺構ごとに遺物を説明する。なお、遺物についての細かな調整・法量等は第1表の観察表に記している。

SD-2 (第15図1~7)

1・2は陶器・碗である。1は口縁端部は丸く、調整は内外面回転ナデで、灰釉が施されている。外面には呉須絵がみられる。18世紀後葉のものと思われる。2は口縁端部が内側に肥厚され、調整は内外面回転ナデで、鉄釉が施されている。18世紀後葉のものと思われる。3は陶器・播鉢である。平底で、内面にクシメが施されている。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、底面は回転ナデである。17~18世紀のものであろうか。4・5は土師器・鍋の口縁部破片である。口縁部は内湾し、端部はナデ窪む。調整は外面ナデ・指押さえ、内面板ナデである。近世のものと思われる。6は平瓦の破片である。近世のものである。7は砥石である。片面の両端を用いて研いでいたようで、片面が磨り減って山状になっている。近世のものであろうか。

SD-3 (第15図8・9)

8は陶器・碗である。天目茶碗の腰部付近の破片である。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリで、内外面に鉄釉が施されている。18世紀以降のものと思われる。9は陶器・播鉢である。体部破片で、内面にクシメが施されている。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。17~19世紀頃のものであろうか。

SD-5 (第15図10・11)

10は磁器・碗である。いわゆる猪口で、口縁部は端部付近で外反する。外面に植物?の呉須絵が描かれている。調整は内外面回転ナデ、底部削り出し高台である。近代のものである。11は土人形である。馬に乗った軍人が型取られているが、馬の脚部と尻部を欠損している。軍人は帽子をかぶっており、一部に色彩が残っている。近代のものである。

SD-7 (第15図12)

12は土師器・皿の破片である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面ナデ、外面未調整である。内面に煤が付着している。近世のものであろうか。

SK-1 (第15図13)

13は石器・剥片である。一部に二次調整のものと思われる細かな剥離が認められる。縄文時代のも

のである。

SK-3 (第15図14・15)

14は縄文土器の深鉢体部破片と思われ、調整は外面削痕のちナデ、内面ナデである。晩期のものであろうか。15は縄文土器の深鉢肩部破片と思われ、稜が認められる。調整は内外面ナデである。晩期の可能性がある。

SK-7 (第15図16)

16は縄文土器・深鉢の口縁部破片である。口縁部はやや外反し、端部は尖る。外面には斜位に押し引きの櫛描文と思われる文様が施されている。内面はナデである。前期のものと思われる。

SK-9 (第15図17)

17は石製品・玉と思われるものである。穿孔と思われる窪みが認められたため、製作段階で破損した玉と判断したが、自然石の可能性もある。玉とすれば縄文時代のものであろうか。

SK-10 (第15図18)

18は磁器・碗である。丸碗で底部を欠損している。調整は内外面回転ナデで、外面に縦位線列の呉須絵がみられる。近世～近代のものである。

SK-11 (第15図19)

19は磁器・碗である。いわゆる猪口で、口縁部は端部付近で外反する。調整は内外面ナデである。内面に僧侶が、外面に高砂の文言が描かれている。近代のものである。

SK-12 (第15図20)

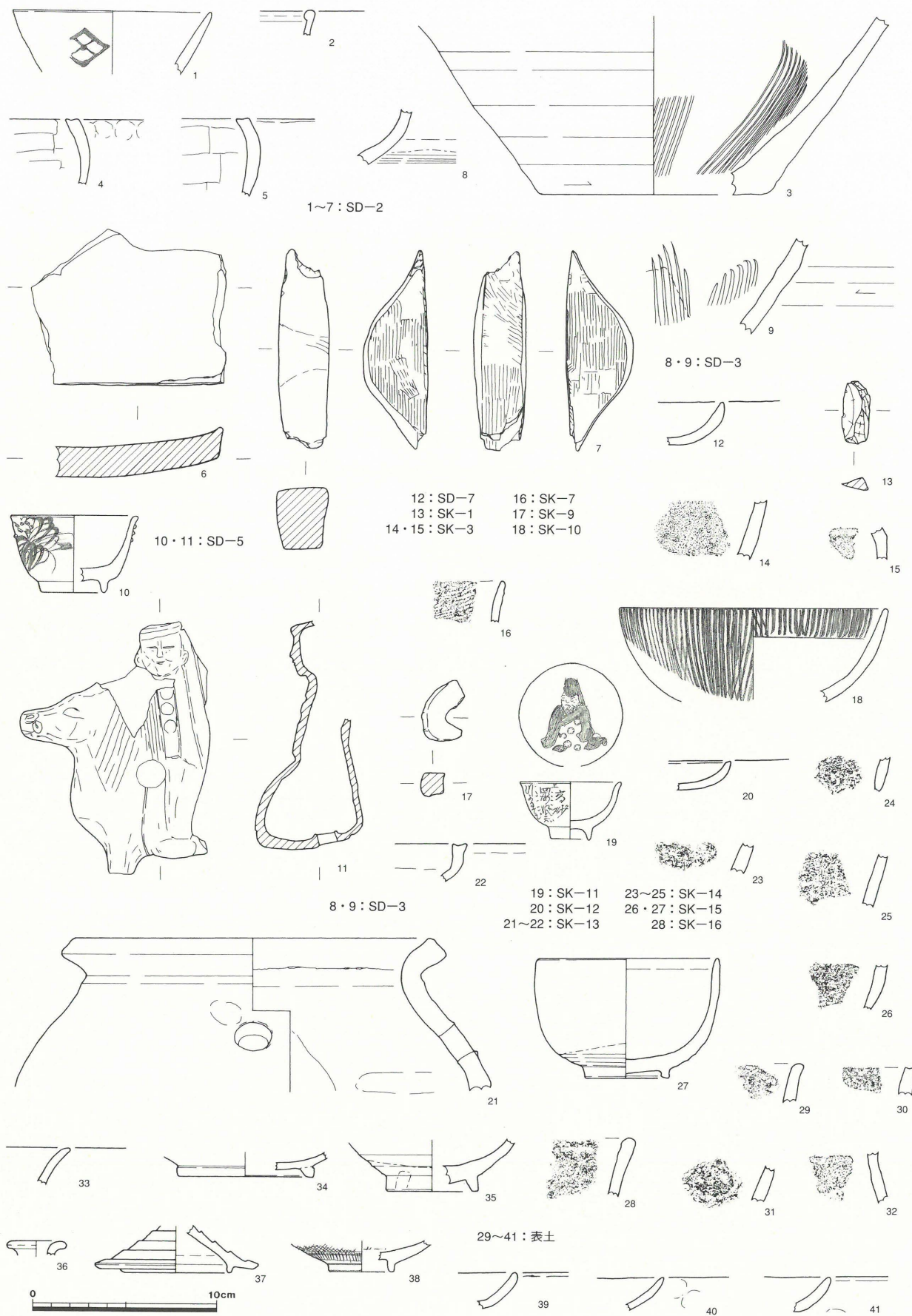
20は土師器・皿の破片である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内面ナデ、外面未調整である。近世のものであろうか。

SK-13 (第15図21・22)

21は陶器・蚊遣りである。口縁部は屈曲して外反し、端部は面をなしている。体部に穿孔がみられる。調整は内面板ナデ・指押さえ、外面回転ナデであり、内外面に煤が付着している。近世のものである。22は土師器・鍋の口縁部破片である。ほうろく鍋と思われ、口縁部は屈曲し、端部はナデ窪む。調整は内外面ナデで、外面に煤が付着している。近世のものと思われる。

SK-14 (第15図23～25)

23～25は縄文土器の深鉢体部破片と思われる。調整は外面ナデ(23)・削痕(24・25)、内面ナデである。晩期のものである。



第15図 出土遺物実測図一1 (1/3)

S K-15 (第15図26・27)

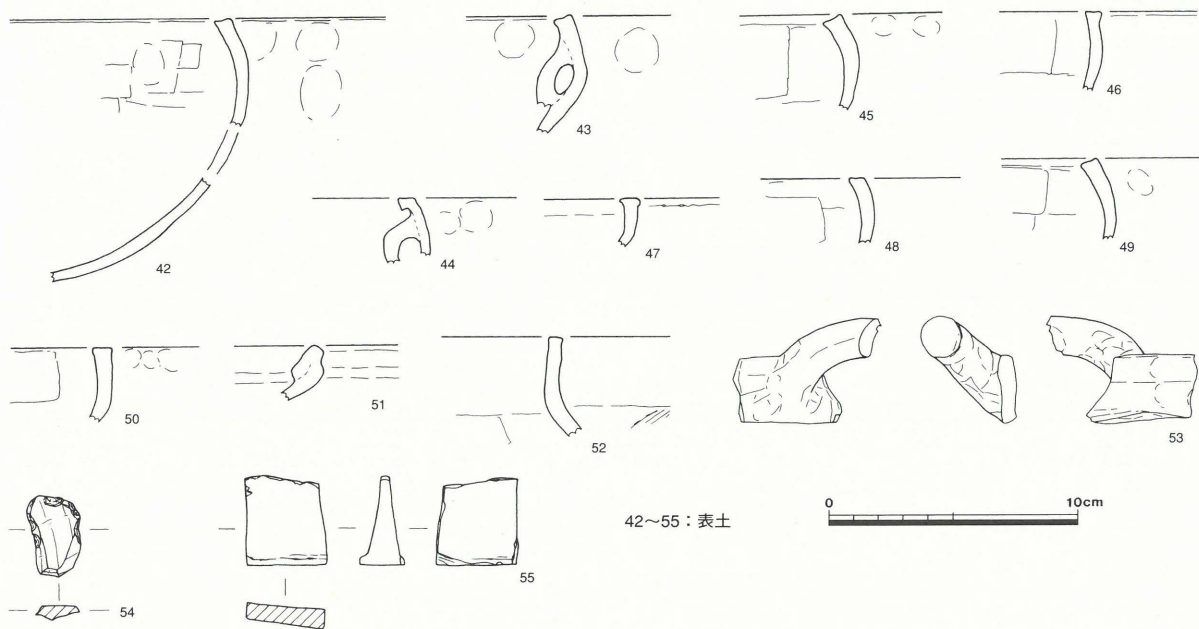
26は縄文土器の深鉢体部破片と思われ、内外面ナデと思われる。晩期のものであろうか。27は陶器・碗である。いわゆる丸碗で、口縁端部は尖る。底部は削り出し高台である。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ、回転ヘラケズリで、柿釉が施されている。18世紀代のもと思われる。

S K-16 (第15図28)

28は縄文土器の粗製深鉢である。口縁部はやや外傾し、端部は面をなす。補修孔が入れている。調整は外面削痕、内面ナデである。晩期のものである。

表土 (第15図29～第16図55)

29～32は縄文土器の深鉢と思われる破片である。29は口縁部破片で、端部は内側からナデ丸められている。調整は外面削痕、内面ナデである。30も口縁部破片で、端部はナデ窪んでいる。外面に縄文または櫛描文がみられ、内面はナデである。31・32は体部破片で、調整は内外面ナデである。これらは晩期のもと考えられる。33は中世陶器・碗の口縁部破片である。口縁部は外反し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。12～13世紀のものであろう。34・35は陶器・碗の底部破片である。34は貼り付け高台で、調整は内外面回転ナデで、灰釉が掛かる。近世のものである。35は天目茶碗と思われ、削り出し高台で、調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリである。内外面に鉄釉が掛かる。18世紀頃のものであろうか。36は陶器・小壺の口縁部破片である。口縁部は強く外反し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデで、灰釉が掛かっている。近世のもと思われる。37は磁器・蓋である。外面は段状に削り出されている。調整は内外面回転ヘラケズリである。近代のものである。38は磁器・皿の底部破片である。削り出し高台で、調整は内外面回転ナデである。内外面に呉須絵がみられる。近世～近代のもと思われる。39～41は土師器・皿の破片である。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整



第16図 出土遺物実測図一 2 (1/3)

は内面ナデ、外面未調整・指押さえである。近世のものと思われる。42～51は土師器・鍋の口縁部破片である。42～50は内耳鍋で、口縁部は内湾し、端部はナデ窪む。調整は内面はナデや板ナデで、外面はナデ、指押さえである。外面には煤が付着している。51はほうろく鍋と思われ、口縁部は短く屈曲し、端部は丸く内面が肥厚されている。調整は内外面ナデである。これらは中世後期～近世のものと思われる。52は土師器・釜の口縁部破片である。口縁部は直立し、端部は面をなしている。調整は内外面ナデ・板ナデである。中世後期～近世のものであろう。53は瓦器・鍋の把手部分の破片と思われる。手づくね成形されている。近世のものであろうか。54は石器・剥片である。一部に二次調整のものと思われる細かな剥離が認められる。縄文時代のものである。55は砥石の破片である。角張った砥石の両面を用いて研いでいたようで、両面が磨り減っている。近世のものであろうか。

第1表 出土遺物観察表

遺物 No.	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
1	G-11	SD-2	T	碗	10.8	(3.4)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・灰釉、呉須絵	
2	G-11	SD-2	T	碗		(1.3)			密	良好	淡茶褐色	内外面回転ナデ・釉	
3	G-11	SD-2	T	擂鉢		(9.7)	12.4		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・クシメ、外面回転ヘラケズリ、底部回転ナデ、鉄釉	釉 茶褐色
4	G-11	SD-2	H	鍋		(3.6)			密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
5	G-11	SD-2	H	鍋		(4.3)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ・指押さえ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
6	G-11	SD-2	N	平瓦	長さ8.6	最大幅10.5			密	良好	黒灰色	内外面板ナデ	
7	G-11	SD-2	R	砥石	長さ10.9	幅2.7						砂岩?	
8	G-9	SD-3	T	天目茶碗		(3.0)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ、外面一部回転ヘラケズリのちナデ、鉄釉	釉 暗黒褐色
9	G-9	SD-3	T	擂鉢		(5.3)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・クシメ、外面回転ヘラケズリ・一部回転ナデ、鉄釉	釉 茶褐色
10	L-5	SD-5	Z	碗	6.8	4.2	3.2		密	良好	明白灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、外面に染付	
11	L-5	SD-5	H	土人形		(13.9)			密	良好	淡褐色	型どり	
12	P-8	SD-7	H	皿		(2.3)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・煤付着、外面未調整	
13	F-11	SK-1	R	剥片		(3.5)		重さ2.5g				頁岩?	
14	J-7	SK-3	J	深鉢		(3.2)			密	良好	淡黄褐色	内面ナデ、外面削痕のちナデ	
15	J-7	SK-3	J	深鉢		(1.8)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
16	K-6	SK-7	J	深鉢		(2.3)			密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面櫛引文?	
17	L-7	SK-9	R	玉?		(3.3)		重さ8.0g	密	良好	淡褐色	砂岩?	
18	N-8	SK-10	Z	碗	14.4	(5.1)			密	良好	明白灰色	内外面回転ナデ・染付	
19	O-10	SK-11	Z	碗	9.4	3.2	2.2		密	良好	明白灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、外面に染付	
20	O-10	SK-12	H	皿		(1.6)			密	良好	明白褐色	内面ナデ、外面未調整	
21	O-10	SK-13	T	蚊取り	19.2	(8.4)			密	良好	淡茶褐色	外面回転ナデ、内面に板ナデ・指押さえ痕、穿孔	
22	O-10	SK-13	H	鍋		(2.1)			密	良好	茶褐色	内外面ナデ、外面煤付着	
23	O-10	SK-14	J	深鉢		(1.7)			密	良好	茶褐色	内面ナデ、外面ナデ	

遺物 No.	地区	遺構	器 種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
24	O-10	SK-14	J	深鉢		(1.9)			密	良好	赤褐色	内面ナデ、外面削痕	
25	O-10	SK-14	J	深鉢		(2.9)			密	良好	赤褐色	内面ナデ、外面削痕	
26	O-10	SK-15	J	深鉢		(2.5)			密	良好	赤褐色	内外面ナデ	
27	O-10	SK-15	T	碗	9.7	6.6	4.4		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、一部回転ヘラケズリ、削り出し高台のちナデ、柿釉	
28	O-10	SK-16	J	深鉢		(3.2)			密	良好	赤褐色	内面ナデ、外面削痕、補修孔有り	
29	O-10付近	表土	J	深鉢		(2.1)			密	良好	赤褐色	内面ナデ、外面削痕	
30	L-7	表土	J	深鉢		(1.5)			密	良好	淡茶褐色	内面ナデ、外面櫛描文または縄文	
31	O-10	表土	J	深鉢		(1.9)			密	良好	茶褐色	内外面ナデ	
32	G-9	表土	J	深鉢		(2.9)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
33	P-8付近	表土	P	碗		(2.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
34	P-8付近	表土	T	碗		(1.4)	7.3		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、貼り付け高台、灰釉	
35	P-8付近	表土	T	碗		(2.8)	4.8		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリのちナデ、削り出し高台、鉄釉	
36	G-11	表土	T	小壺	2.8	(0.8)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・灰釉	
37	N-8	表土	Z	蓋	5.8	(2.6)	最大径 8.8		密	良好	淡白灰色	内外面回転ヘラケズリ	
38	F-8	表土	Z	皿		(1.7)	3.6		密	良好	明白灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、内外面染付	
39	K-6	表土	H	皿		(1.9)			密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面未調整	
40	O-10付近	表土	H	皿		(1.7)			密	良好	褐色	内外面ナデ、外面一部指押さえ	
41		表土	H	皿		(1.9)			密	良好	淡褐色	内面ナデ、外面一部指押さえ	
42	H-10	表土	H	内耳鍋		(10.8)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ痕・一部マメツ、外面ナデ・一部ヘラケズリ・指押さえ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
43	P-9付近	表土	H	内耳鍋		(4.8)			密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ・指押さえ、煤付着	
44	H-9付近	表土	H	内耳鍋		(2.6)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ・指押さえ、煤付着	
45	H-9付近	表土	H	内耳鍋		(3.9)			密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
46	H-9付近	表土	H	内耳鍋		(3.2)			密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
47	O-10付近	表土	H	内耳鍋		(1.9)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ、煤付着	
48	G-11	表土	H	内耳鍋		(2.6)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
49	G-9	表土	H	内耳鍋		(3.3)			密	良好	淡茶褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
50	H-9付近	表土	H	内耳鍋		(3.0)			密	良好	淡茶褐色	内面板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ、口縁部ヨコナデ、煤付着	
51	O-10	表土	H	焙烙		(2.3)			密	良好	淡橙褐色	内外面ナデ	
52	H-9付近	表土	H	釜		(4.1)			密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ・内面一部板ナデ	
53	N-8	表土	N	鍋		(4.3)			密	良好	淡灰色	手づくね	
54	P-8付近	表土	R	剥片		(3.4)						チャート?	
55	N-8	表土	R	砥石	長さ 3.6	幅3.2					重さ 6.1g 重さ 18.5g	淡灰色 砂岩?	

※法量の数値はcm、()は残存数値。

J-縄文土器、P-中世陶器、T-陶器、Z-磁器、H-土師器、N-瓦製品、R-石製品

第5章 まとめ

中郷遺跡は、過去に行われた分布調査及び範囲確認調査では、中世～近世を中心とした遺跡で、遺跡そのものはかなり希薄であることが推測されている。今回の発掘調査は、中郷遺跡において初めて行われた本格的な発掘調査であり、ちょうど遺跡全体にトレンチを入れた遺跡の確認調査と類似した内容となった。ここでは、今回の調査によって判明したことをまとめる。

まず、縄文時代の遺構、遺物が検出されたのは予想外であった。出土した縄文土器は、前期と思われるものが1点で、他は晩期頃のものとして推測されるものが少量出土しているのみである。また遺構は希薄であるが、大型の土壇が2基検出され、風倒木痕と思われる土壇も散在して確認されている。対岸の眼鏡下池北遺跡からは平成17年度の調査で早期の煙道付炉穴や竪穴住居が検出され、押型文土器が出土している。隣接する両遺跡であるが、時期が異なっているため両遺跡には関連性はない。

弥生時代から中世前期にかけては遺物が殆ど出土していない。このため、この時期には人々がここで活動していなかったものと考えられる。

主体となる時期は、中世後期から近世である。屋敷の区画溝と掘立柱建物が9棟確認されている。溝は20～40m間隔にあり、かなり広範囲な屋敷地の区割りが想定される。時期が特定される掘立柱建物はなかったが、溝の時期や表土など出土の遺物からこの頃のものと思われる。屋敷地内に数棟の建物が建っていたのであろう。今回の調査では、建物は復元できなかったが、土壇が多数検出されていることから、もっと数多くの掘立柱建物が存在していたものと考えられる。ただ、遺構の数の多さと比較すると遺物はコンテナ1箱未満と極端に少ない。市内の同時期の集落遺跡を調査すると膨大な量の遺物が出土するのが通常であるが、中郷遺跡では殆どみられない。この点は範囲確認調査での所見と同じである。しかし、これだけの遺構の数からすると、長期的に継続した集落であることは予想される。中郷遺跡では、土器などの日常品を使っていなかったとは考え難いことから、例えば北側の眼鏡川に捨てるなど、廃棄場所が異なっていた可能性も想定できよう。

平成17年度に調査した隣接する中郷西遺跡の調査では、中郷遺跡とほぼ同時代の中世後期から近世にかけての掘立柱建物や区画溝などの集落跡が発見されており、同時期に隣接して集落が存在していることがわかっている。この遺跡においても、中郷遺跡ほどではないが、遺物の出土量が少ないのが特徴的であった。中郷遺跡、中郷西遺跡は関連性が高く、同一の集落であった可能性も考えられ、眼鏡川沿いに集落が展開していたものと思われる。

以上まとめると、中郷遺跡は中世後期から近世にかけて、眼鏡川に面した台地縁部に形成された集落址と結論付けられる。また、縄文時代においても人々は何らかの活動をしており、キャンプサイト的な遺跡であったものと解釈できよう。

写真図版



1. 調査区全景（垂直）



2. 調査区全景（東から）

写真図版 2



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（南から）



1. D-6区~G-9区付近全景 (垂直)

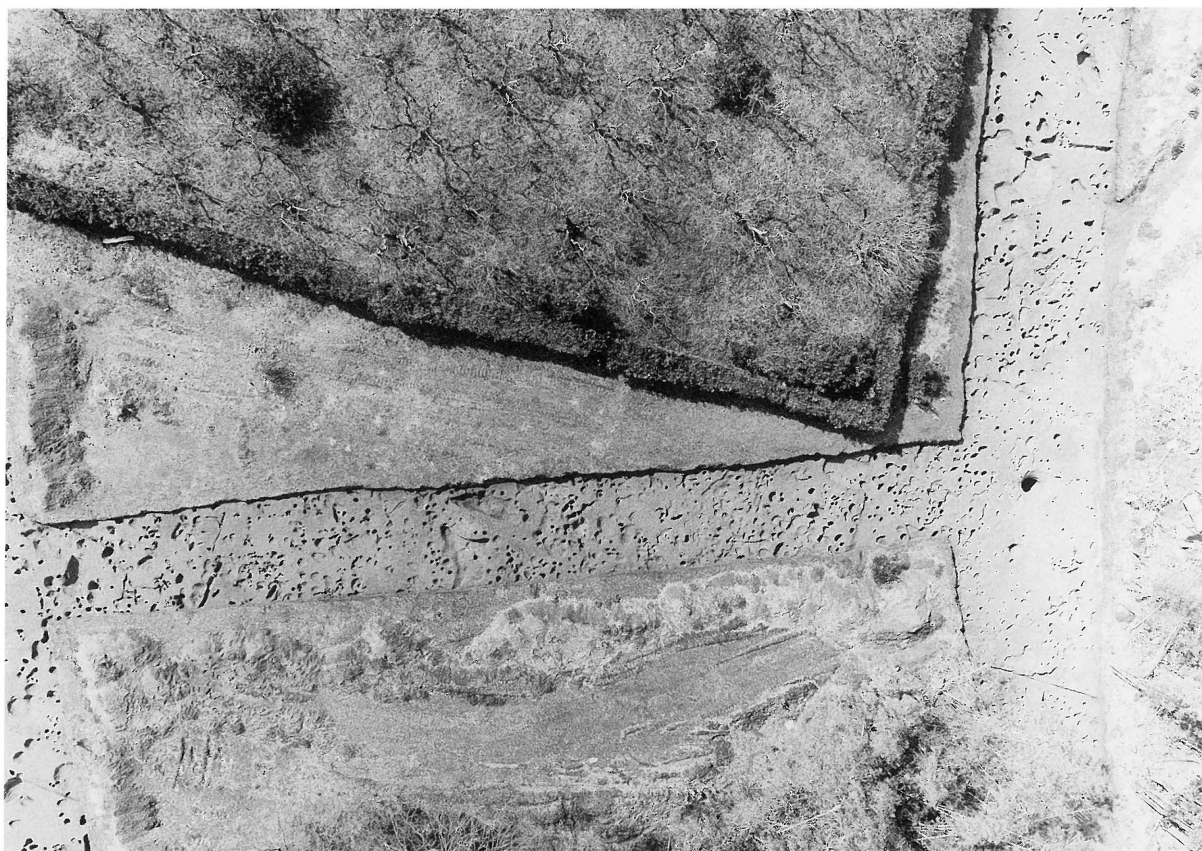


2. F-10区~J-8区付近全景 (垂直)

写真図版 4



1. J-7区~M-5区付近全景（垂直）



2. L-6区~O-9区付近全景（垂直）



1. N-11区~Q-11区付近全景 (垂直)



2. SB-2全景 (北から)

写真図版 6



1. SB-6全景 (北から)



2. SB-7・8遠景 (西から)



1. SA-1全景 (北から)



4. SD-1全景 (東から)



2. SA-1・P1 (北から)



3. SA-1・P2 (北から)

写真図版 8



1. SD-2全景 (南から)



2. SD-3全景 (北から)



3. SD-4全景 (北から)



4. SD-5全景 (北から)



1. SD-6全景（西から）



2. SD-7北部分（南から）



3. SD-7全景（西から）

写真図版10



1. SK-2 (北から)



2. SK-3 (東から)



3. SK-8 (北から)



4. SK-14 (東から)



1. SK-4 (北から)



2. SK-6 (北から)

写真図版12



1. SK-11~13・16 (東から)



2. P-8区風倒木痕 (西から)



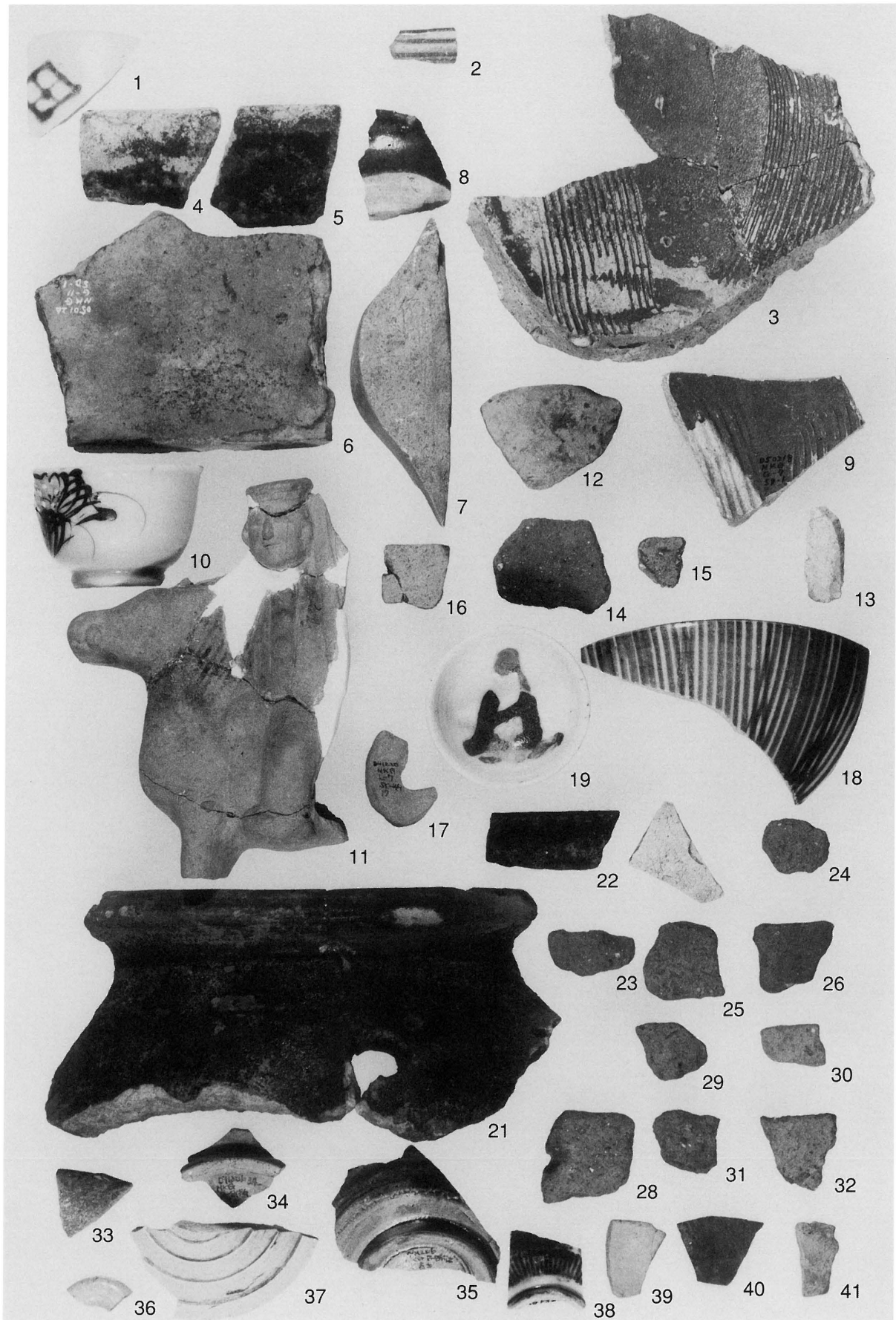
1. M-8区風倒木痕（北から）



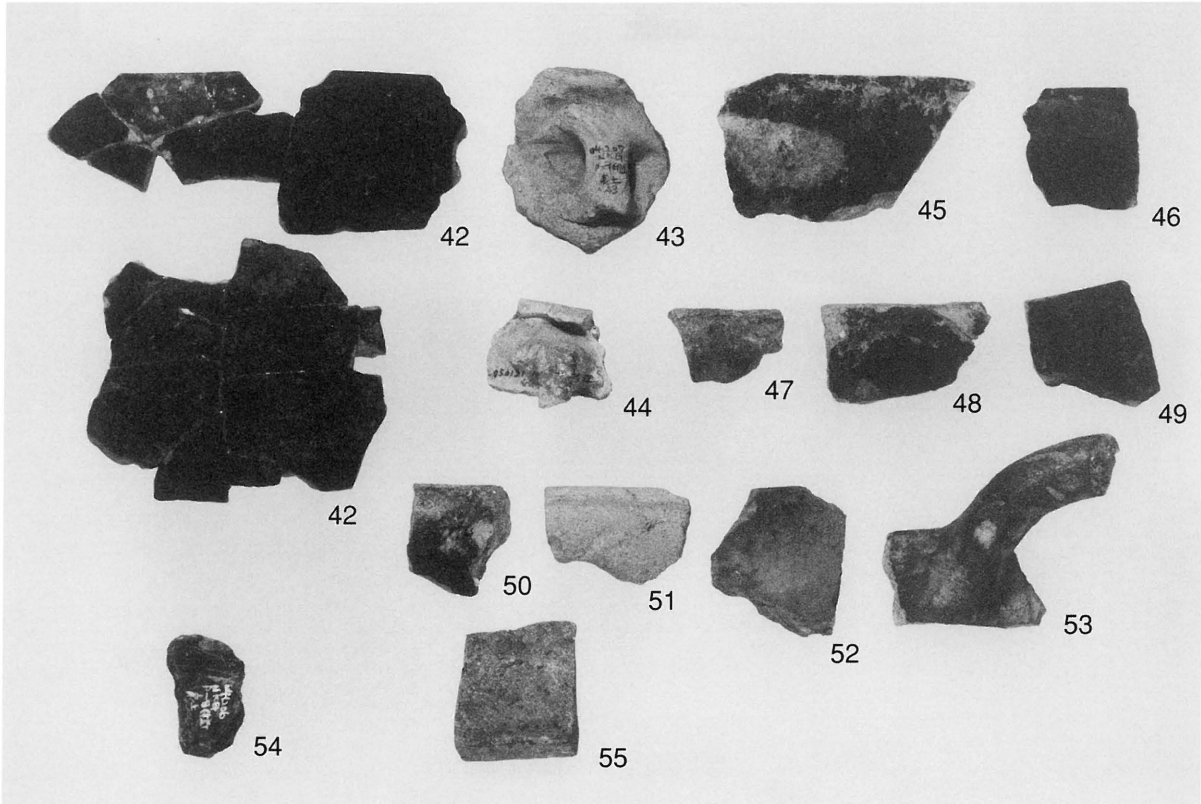
2. M-8区風倒木痕（南から）



3. 現地説明会風景



出土遺物一1



報告書抄録

ふりがな	なかごういせき							
書名	中郷遺跡							
副書名	牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第90集							
編著者名	岩瀬彰利							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 TEL0532-51-2879							
発行年	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかごういせき 中郷遺跡	とよはししゅうしかわちよう 豊橋市牛川町 あざなかごう 字中郷	23201	79765	34度 46分 55秒	137度 25分 14秒	20041201 ~20050227	1,400m ²	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中郷遺跡	集落遺跡	縄文 中世~近世	土壇 掘立柱建物、 溝、土壇	縄文土器、石器 陶器、磁器、土師器、 砥石				

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第90集

中郷遺跡

牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2007年3月31日

発行 豊橋市教育委員会◎
美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 共和印刷株式会社